

古田武彦講演会 一九九八年 九月二十日(日)午後二時より四時

於：大阪 豊中市市立生活情報センター「くらしかん」

古代史再発見

卑弥呼(ひみか)と黒塚

—方法—

まえがき

古田でございます。今まで古代史に関心がなかった方々に対して話をしたいという主旨で、講演の要請がございました。私にとつても大変けっこうな主旨と思つて、お引き受けしました。司会の方の挨拶にありましたように『「邪馬台国」はなかった』を出してから三十年近く経つていますが、依然いぜんと言いますか、いよいよと言いますか、無視されたままのケースが横行して、依然いぜん世間よに通用されています。そのことに対して一種の危機感と言いますか、義憤を覚えられておられることをお聞きしました。それは非常に忝かたじけなく思つております。わたし自身としましては、性格かどうか知りませんが、もつと樂觀的でありまして、そのような議論は、わたしから見ると誤つた議論ですが、それは理由があつて行われてきた。どのような理由かは、また講演の中で十二分に、お話しすることになると思いますが、現在の支配体制というか、学問の体制というか、明治以後天皇家を中心に日本の歴史を教えるという立場を行つてきた。一言で言う「天皇家一元主義」です。それを是として行つてきた。その立場は敗戦後も本質的に変わつてはいない。その立場から見て、それに一番反する考えというか、異なつた立場には迫害するということと戦前でしょうが、戦後は迫害するという形を取らないが、無視するという方針というか態度で来ています。その辺りのことは、三回の講演の中で具体的にお分かりいただけると思つております。

わたしはそういうことをしても、所詮それは一定の時間だけであり、ある体制や権力が続く限りのことだけである。長い歴史の中では、生き残るは真実の方である。真実を、臭いものを蓋をするようにしてきた権力や体制は、それは時間が経てば霧のように消え去るということを疑つておりません。それは大変樂觀的なのですが、しかし現実には厳しいという見方もございます。それは時間のスタンスというか、どれくらいの時間帯で考えるかの、見方の違いだと思ひますが、大変ありがたいことであると思つております。

それで今日私の話をお聞き頂いた方々が、「全然くだらんよ。」とお思ひになられたら、お捨てになればよろしい。「これはホントだ。大切な話だ。」と思われたら、またその立場で考えていただければありがたいと思ひます。このような、こういうつもりでございます。

三国志紹熙本(二十四史百衲本)

副曰卑弥呼母離有子餘家南至投馬國水行二十日官曰彌彌副曰彌彌那利可五萬餘戸南至邪馬壹國女王之所都水行十日陸行一月官有伊

『古代史六〇の証言』(駿々堂)より

一 「壹(イチ)」の論証

前置きはそれぐらいにして、さつそく本題に入らせて頂きます。わたしが古代史に入った入り口は『三国志』の魏志倭人伝です。卑弥呼(ひみか)と通常言われていますが、わたくしは卑弥呼(ひみか)

と言いますが、その卑弥呼のことを書かれた時代があります。その国のことを世間では「邪馬台国（やまたい）国、邪馬台国」と言っており、ところが実際は「邪馬台国」という言葉は全く出てこない。出てくるのは「邪馬壹（やまいち）国」という形で出てまいります。

南至邪馬壹國女王之所都 南、邪馬壹国に至る。女王の都する所

これは『三国志』の原文ですが、そういう有名な言葉で国名が早い段階で出て参ります。現在はウ冠にカタカナの「ヒ」のはいつた「壹」が使われていますが、旧漢字では「豆」の入った「邪馬壹国」という形で出てまいります。

版本で示しますと、ここにも「邪馬壹国」、「豆」の入った「邪馬壹国」という形で出てまいります。「臺(ダイ)」ではございません。「臺」は、旧漢字では「至」が入っています。

古田史学の会の方から「壹」という字を書いて欲しいと頼まれました。字を書くのは不得意で断ったのですが、「どうしても」と言われましたので書いたものでございます。これは最も古い版本である南宋代の紹熙本の「壹」という字を取ったものです。全く同じに書いたのでは盗作になりますので、少し書き加えたものです。どこかというところ、最後の字に「足跳ね」を加えたものでございます。盗作に対して模倣というか、見る人が見たら分かるように少し変えるのが礼儀ではないかと思っております。九九パーセントは紹熙本の「壹」です。どう見ても「臺」ではありません。

『三国志』では早い段階の南宋版に紹興本・紹熙本と二つありますが、どの版本も「壹」、いずれも「邪馬壹国」という形で出てまいります。それより少し新しい北宋版も「壹」です。一つだけ違うと言えは違うものがあります。北宋版を中国の清代に復刻したもの

が東京の静嘉堂文庫にあります。それはなんと簡単な横棒の「一」の字である。これは何も見間違ふことは出来ない。二つあると言え、豆の入った「壹(イチ)」と、横棒の入った「一(イチ)」だけである。「臺(ダイ)」はゼロ。これは議論でなくて事実である。版本の事実関係です。わたしなどは、ちょうど三十代親鸞に没頭しまして、筆跡を求めて写本・版本を寝ても覚めても夢中で調べておりました。そういう版本・写本が大事だったのです。

古代史も同じく写本・版本を調べました。ですから、そういう状況に対して、「邪馬一國」を「邪馬台国」というのは、ちよつと問題である。

なぜ、そのように直したか。そう考えて調べましたら、わりあい簡単に分かりました。江戸時代の始めに松下見林という坊さんがいました。この人が日本史の研究を行いまして、そこで『異称日本伝』と題する本、中国を主とする外国で書かれた歴史書に出てきた日本の記事、『倭人伝』や『倭国伝』等いろいろ有りますが、そういうものを集めて一冊の本にした。

そこで彼は序文で言う。こうして外国の歴史書をいろいろ集めた。我が国のことがいろいろ書かれているので読む人はたいへん迷う。しかし迷う必要はない。なぜならば、わが国には国の歴史がある。歴史書がある。舍人親王のお造りになった『日本書紀』である。これを元にすればよい。だからそれに合うものは取り、合わないものは捨てればよい。合うものは採用し、合わないものは外国人が間違えたのだからペケ、改編すればよろしい。この方針である。

この言い分を読んでいて何となく、なつかしかつたですね。青年時代戦争中最もよく聞かされた「ものの考え方」のスタイルはこれなんです。根本はこれだ。これをまず決めて置く。それに合うものは取り、合わないものは捨てればよい。青年時代盛んに教えられ

ました。一番大事なことをまづ決めて置いて、それに合うものは取り、合わないものは捨てれば良い。その方針さえ立てれば、そうすれば迷うことはないですね。戦時中にそういう「ものの考え方」を教わった。判断の仕方を教わった。『日本書紀』が正しい。『日本書紀』に合っていたら、「なかなか良いことを言っている。お前正しいことを言っている。」と採用し、合わないものは「おまえ、相手にならん。」と。外国人が間違えた、相手にしない。この方針である。実に単純明快である。

それで『異称日本伝』の魏志倭人伝を見ました。その『異称日本伝』という本を見ましても、そこにも「邪馬壹国」と書いてある。ところが、そこに注を書いて加えてある。わが国では、天皇は代々大和(ヤマト)に居られる。合わないのは外国人が間違えた。直したらよろしい。そう書いてある。「壹(イチ)」を「臺(ダイ)」と直してある。「邪馬壹(ヤマイチ)国」では、いくら松下見林でも「邪馬臺(ヤマト)」と読みにくい。「壹(イチ)」を「ト」とは読めない。ところが「臺(ダイ)」なら「ト」と違うけれども、同じ「t」音であり、音便が、「ト」と感覚としては読めそうだから、「壹(イチ)」を「臺(ダイ)」と直した。「邪馬臺(ヤマト)」と読めそうな気がしますから。「邪馬臺(ヤマダイ)」と読んだわけではない。「邪馬臺(ヤマト)」と読んだ。これを見たとき、わたしは「やはり!やばいよ。」と思った。

なぜならば同じような経験を三十代親鸞研究で経験した。わたしの方は親鸞という人間、歴史上のありのままの姿を知りたい。生きた歴史を知りたい。その一心だった。ところが写本・版本をいろいろ調べていきますと直されている。なぜ直されているかというところ、親鸞聖人は教団ではこういう事になっている。それで合わないのは写し間違いに違いない。そう言って変えてしまう。そうすると絶対教団の教義に合う。変えてしまうのだから。しかしそれはその時の

教団の教義を、立場を知りたい人間には意味がある。しかしわたしのように、本来鎌倉時代に生きた「一人の人間・親鸞」。そういう人物の、ありのままを知りたい。それだけの立場で研究しています。それから見てゆくと、それではどうも具合が悪い。これの研究そのものは割合簡単でして、直された字が、元々の直されない元の字だったらどうなるか。江戸時代ではなく、直されないままの鎌倉時代の用法で読めばどうなるか。親鸞の生きた同じ鎌倉時代の用法で読めばどうなるか。鎌倉時代の史料がたくさんありますから。鎌倉時代の同じ用法を調べて、同じ読み方をすればよろしい。その結果直されない方が良い。そういう問題に次々ぶつかった。例はいろいろありますが。

それを直し始めたのが大体江戸時代初めの僧侶であり学者です。松下見林も同じ江戸時代の初めで京都に居たお医者さんです。医者さんも僧侶も同じというか、同じインテリ仲間です。同じ穴のムジナというか同じ手法を取る学問の仲間である。それが今言ったような基本となる親鸞聖人の姿をまず決めまして、その立場に合わない写本・版本が出てくれば間違いだから、それを直せばよろしい。そのようなやり方をする。同じようなやり方を松下見林も行なった。わたしはそれは具合が悪いと考える。

それだけでは不十分ですから、一つの方法を考え検査を行いました。その検査というのは『三国志』の中で「臺(ダイ)」を「壹(イチ)」に間違えた。まずこう考えます。「邪馬臺(ヤマダイ)國」と本来書いてあったのを、誰かが写し間違えをして、「邪馬壹(ヤマイチ)國」となった。「至」と「豆」が入っているだけの違いですから、その程度の違いですから似ているとも言えないこともない。「壹と臺は形が似ている。」と言えないこともないし、間違えたという考え方も出来ないこともない。『三国志』の中で「間違えた。」と考えて検査した。

これは親鸞で私がやった方法ですが非常に簡単なのです。『三国志』の中で「壹(イチ)」という字を全部抜き出して調べてみる。手間はかかりますが、方法としては簡単です。全部抜き出して調べてみた。それを「臺(ダイ)」と間違っているか調べてみたが「臺」になってない。ちょうど恵まれておった。なぜかという「壹」というのは、ご存知横棒の「一(ひとつ)」という意味である。「臺」というのは盛土のことです。今の見晴らしの良い所という意味で住宅の宣伝に使っている「く台」という言葉がありますが、同じ見晴らしの良い所である盛土、そこに建てられた宮殿の意味の「臺(ダイ)」です。「臺(ダイ)」は「壹(イチ)」とは全然意味が違っている。これは非常に容易である。何故かという文章の前後関係を見て、どちらであるかを検査出来るではありませんか。

これももし「土の盛土」と「石の盛土」の違いならば、どちらとも取れるし、片方が「一」で、片方が「二」なら、どちらに解釈するか、また問題になる。

しかし「盛土ないし宮殿」の意味なのか、「一・二」という数字の意味なのかは、文章の前後関係を見れば決まっている。非常に幸せなことに判別が容易です。

それで「壹(イチ)」という字を全部抜き出して、「臺(ダイ)」という字も抜き出していった。私は正直言って「中には間違えた。」と思われるケースが出てくるのではないかと思っていた。他の学者も「壹」は「臺」の間違いだ。そう言っているし、そういうケースが出てくるのではないかと考えていた。「まあ、しかし納得できない。」と一応調べてみた。自分に納得するためにというのが正確ですが、全部抜き出して調べて見た。ところが調べてみると意外や意外。この両者の間違いであるケースは全く出てこない。

「臺(ダイ)」と「壹(イチ)」の間違いはゼロ。

但し例外はある。固有名詞に付いている「壹(イチ)」と「臺(ダイ)」とは区別は難しい。親が付けるのでしようが、一番賢くなつて欲しいとか、長男であるという意味から「壹」を付けたら、近くの山や丘にちなんで「臺」を入れるのでしようが、本当のことは親に聞かなければ分からない。固有名詞の場合は原則的には分からない。分からないと言うことは、誤りであるとも、ないとも言えない。それは一応除くのが賢明である。

しかしその他の文章に出てくる中では100%、間違いのケースは見られなかった。意外や意外でしたね。わたしは念のためにやってみただけだ。間違いは有るだろうし、他の学者も全てそう言っていた。そういう先入観があつたから、念のため全部抜き出して見た。ところが行つた結果は意外や意外。全く間違つたケースはゼロ。全く間違いはなかった。

さらに副産物があつて分かつた。大体こういうものは調べるうちに副産物が出ることが多い。「臺(ダイ)」は盛土、そこに建てられた宮殿の意味ですが、更に天子を意味していた。そういう意味で使われていたことが分かつた。これは『倭人伝』の中で区別できる。ここは卑弥呼の次の壹與が、魏ではなく後の西晋朝に使いを送つて朝貢した記事であり、ここに「因詣臺 因りて臺(ダイ)に詣でる」とある。

壹與遣倭大夫率善中郎將掖邪狗等二十人送政等還因詣臺獻上男女生口三十人貢白珠五千孔青大句珠二枚異文雜錦二十四

ここの「臺(ダイ)」というのはただの宮殿ではなくて天子のことである。天子と宮殿に詣でたと書いてある。又この用法が『三国志』に、ところどころ出てくる。しかもそれだけではなくて、同じ『三

『国志』ではありませんが、同じ同時代史料では『魏臺雜訪議』高堂隆選』という史料では「魏臺（ギダイ）」という言葉が出てくる。「魏臺」というのは天子のことである。高堂隆という人物は魏の天子の一の家来・大久保彦左衛門的な御意見番的な人物である。「天子にこう申し上げた。天子はこう答えられた。」そういう天子と御意見番との両者の対話の記録である。その場合、『魏臺雜訪議』では天子のことを「魏臺（ギダイ）」と呼んでいる。

（編集者追記、この書物はそのものは残っていません。）

『邪馬一國への道標』角川文庫 P147)

現在でも「殿下」や「殿」と呼んでいるが、「殿」も元は建物であって、それが現在では「殿」も建物ではなく、建物に住んでいる御主人のことをそう呼ぶようになった。「殿下」という言い方も曲折があつて、「殿」と呼ぶのは恐れおおい。だから「殿下」という表現で御主人をそう呼んだ。同じ言い方である。「魏臺（ギダイ）」というのは「魏の宮殿」という言い方で、宮殿に住んでいる天子のことを指す。

『倭人伝』も、そのような言い方であると考えるのがより適切である。「因詣臺 因りて臺（ダイ）に詣でる」とは、壹與が送った使いは宮殿に至った。同じ言い方ですが宮殿に行つて、使いが天子に会わなかった。そう取ると話がおかしくなる。使いは天子に会つたと理解するのが当然である。この場合の「臺（ダイ）」も天子の意味に取るのが適切である。

以上「臺（ダイ）」というのは、一字で天子その人を指す言葉である。そういうことが分かった。

そうなりますと「邪馬臺（ヤマダイ）」を「ヤマト」と読むためには、奈良県の大和（ヤマト）と仮定して、西晋の歴史官僚である陳寿という人が「ト」を表す字は色々ある。諸橋大漢和辞典などを引くと「ト」を表す字はたくさん並んでいる。その場合どれを使つても良い。そ

れをわざわざ他の字を使わず、いきなり天子その人を指すという慣例が確立している。「臺（ダイ）」という文字を使つて表記する。そういう可能性があると思いませんか。天子の元の官僚ですよ。官僚は他のことは無視しても、絶対にそのことを忘れることは有り得ない。それをミスしたら大変なことになる。加えて「邪馬」も良い字ではない。「ヤ」は「正邪」の「邪」を使っている。「マ」の「馬」という動物も中国人が尊敬している動物ではない。そういう表音の字を使つているところから見ると、第三の字をわざわざ天子そのものを指す字である「臺（ダイ）」という字を使つて「ヤマト」と表記することは有り得ない。大いに有り得ないと判断しました。

「邪馬壹（ヤマイチ）国」が「邪馬臺（ヤマダイ）国」の間違いという考え方は承服できない。

それを東大の史学雑誌に「邪馬壹国」という題の論文として投稿しました。幸いにこれが採用され掲載されました。これはわたしが古代史に関して公式に発言し関係する発端になった。この問題のため押しを申させて頂くと、この問題はその後論争がありました。まもなく東大の現役の教授で、新説を発表しておられた榎一雄氏という学者が読売新聞で「邪馬台国はなかつたか！」という面白い題で連載があり、十二回に渡り全文で私の説を批判された。わたしはこれに対し同じく十二回原稿を送つたのですが、結局編集部の方で十回に縮めて掲載されました。論争致しました。これは『邪馬壹国の論理』（朝日新聞社絶版）に収録されています。京都新聞では、駒沢大学北海道の三木太郎氏と論争を三年間に渡り行いました。これも「古田武彦と古代史を研究する会（略称東京古田会）」という読者の会が編集された『まぼろしの祝詞の誕生』（新泉社）という本に収録されています。以上内容はいちいち申しませんが、いずれにおいても少なくとも、わたしに納得できる論拠を挙げた反論はあり

ませんでした。

私を論破するのは非常に簡単です。古田はそう言っているが、お前の見方は浅いよ。『三国志』の一番古い写本・版本を調べまして、この写本・版本には「壹(イチ)」ではなく、ちゃんと「臺(タイ)」と書いてある。お前はそれを見逃しているよ。それを示して頂ければよい。そうすれば反論も何も要らない。それを示せば私は直ぐ納得する。感謝するほかはない。ところが、わたしがここに示した版本、紹興本・紹熙本・北宋本の前に、「臺(タイ)」と書いてある版本は示されることは全くなかった。そればかりではなく後の版本でも『三国志』の中で「臺(タイ)」と書いてある版本は示されることはなかった。史料事実としては、後にも先にも『三国志』と名乗る版本には「邪馬壹国」しかない。そういうことが改めて確認されただけだ。それでは、わたしは「邪馬壹国」を「邪馬台国」と改めるわけには参りません。「壹(イチ)」を「臺(タイ)」と書いてある事実は確認することは出来ない。

あるいは、もう一つの方法もないことはない。わが国はやはり天皇家が縄文時代よりずっと中心である。そういう言うとお聞きになつていらっしゃる皆さんは「何を下らん。」と言われるかも知れないが、現にそういう意見もあつたのです。もちろん戦前ですが、考古学会の会長が講演でそういう意見を述べている。

たとえば第二次世界大戦前、奈良県でイトクの森という所で、考古学者が前方後円墳を調査した。表現が正しくはないが今の概念で言えば前方後円墳、本当は方円墳ですが。その前方部が畑仕事で削られた古墳が出てきた。ところがその下から石棺と縄文時代の遺物が出てきた。明らかに石器・土器しかない墓だった。これは明らかに縄文時代の墓である。神武・綏靖・安寧・懿徳と呼ばれる天皇、

その懿徳(イトク)と関係するか分からないが、カタカナで字地名が「イトクの森」。「その前方後円墳の前方部の下から、石器時代の石器・土器が出てきた。そうすると我が皇室は石器時代からずっと中心で、栄えてきたことが分かったのであります。」と、そう一時間以上にわたって記念講演として演説をした時代がある。

現在の知識から言えば間違いですね。この円墳は陪塚ばいちやうと考えられる。前方後円墳の下にある陪塚はない。陪塚は横にある。陪塚とは家来の墓である。それを下に有ると言った。現在の我々の知識水準からは、そう言える。とにかく考古学者がそういう演説をした時代がある。

皆さんは今更そんなことを思っている方はいないでしょうが、大和の天皇家が、そこまで縄文や弥生からずっと中心で栄えていた。その点は関東であろうと、九州であろうと文明は全て遅れていたのだ。そのような証明をして頂ければ、松下見林の書いたように、昔から大和が中心となる。その証明をしてみれば、もしそうなら私は考えが足りない。松下見林が正しかったですねと、自分の説をいつでも撤回する。私は「反松下見林の立場」に立つて解釈しようとか、全くそのような立場ではない。

結局どちらの立場も示されることは全くなかった。

結局は松下見林がさきほど言ったような理由で、邪馬台国にしたほうが「邪馬臺(ヤマト)」と読むためにそこそこ良いのではないかと、「壹(イチ)」を「臺(ト)」に変えた。わたしから言うとな枝葉末節の理由で「臺」にした後説明。いくら後説明をしてみても、歴史上の直接表れた出发点は、先ほど言ったように松下見林のやったような出发点から来ているという事実を誰も消すわけには行かない。わたしの知っている歴史学、世界における悠久普遍の人間の歴史学の立場から見れば、そのような直し方は全く具合が悪い。それを昔の古典

ですから、昔の文書には全く誤りがないはずはない。それを古典には全く誤りがないと、古田は言い切っている。そう思いこんでいる、くだらん奴だ。そう言つて、ずいぶんお怒りの方がおり、そう言われた時期がある。その件は、わたしには全く関係がない。版本が間違つていたり写本が間違つていたりすることは常にある。親鸞研究ではそれが舞台で、おそらく九十パーセントは間違つていた。わたしは版本や写本に誤りがあるという事は、親鸞研究でそれは百も承知だ。ただ、それは「誤りが有り得る。」という一般論で、「これが誤りだ。」ということを証明するには手続きを必要とする。わたしのやつていた中世史では手続きが必要だと思つています。だから「臺(ダイ)」と「壹(イチ)」が間違つていふことを説明することは出来ない。「邪馬台国」は容認することは出来ない。

以上のお話が東大の史学雑誌に記載された「邪馬壹国」という論文の前身です。以上そのことは『邪馬壹国の方法』(駿々堂)―多元的古代の成立上―に全文収録されております。

以上わたしが、今言つたお話が「邪馬壹国」論です。「それはおかしいよ。ここは全然筋が通らないよ。」と御指摘下されれば幸いです。いや話としては十分筋が通つている。そう思われて歴史学者や考古学者が邪馬台国と言つていふのはおかしい。そう言つていただければ、それも幸いです。

二 無里の邪馬台国

さてそれでは次のテーマに移らせていただきます。

先日わたしの大好きな映画監督の黒沢明氏が亡くなられた。あの方の映画の中で、ある意味で独特の印象が深かつた映画がございます。それが『生きる』という志村喬主演の映画でございます。何故かと言いますと、私の一つの経験から来ています。

東大の史学雑誌に「邪馬壹国」という論文が九月の終わりに載りました。その後十月の初めに読売新聞に大きく記事が載りました。その件で十一月の始めに、当時学校の教師をしていた洛陽工業高校に、朝日新聞出版局(当時)の米田さんという一人の紳士が来られて、「新聞記事を拝見しましたが、読売新聞さんから本を出されないなら、朝日新聞から本を出されませんか。」と言つて来られた。わたしは大変ありがたい話ですがお断りした。「邪馬壹国」については東大の史学雑誌に掲載されたことが全部である。東大の史学雑誌に載つた主旨、それ以外は何もない。

「邪馬台国、邪馬台国と言つているが、原本は邪馬壹国となつていふ。邪馬壹国にもう一度帰られて、そこから再出発すべきではないでしょうか。老婆心ながら中世の研究者から古代史の方々には生意気ですがご忠告申し上げます。」

そういう主旨の論文だつた。それが済んだら親鸞研究という中世史に帰るつもりだつた。今の論文だけでは本になりません。無理ですとお断りした。しかし四・五日経つてまた来られる。「ちよつと近くに来ましたので、どうでしょうか。気が変わられたでしょうか。」とまた来られる。何回断つても言つて来られる。だいたい来られること自体が、押しつけがましいと言え言えなくはないですが、非常にあつさりしている。また電話を何回もしてこられる。何回断つ

でも。決して押しつけがましくはないのですが、しかし何回も言つて来られる。終わりににはなんだか私の方が居ゐがちが悪く、「邪馬壹国」がどこにあるか、見当もつかないが、少し研究してみようかと思つた。そう思い始めたは良いけれど、大きな障害があつた。

その当時「邪馬壹国」の在あり処は、分からなかつた。邪馬一国はただ出てくるのではなくて、方角・里程付きで出ていた。史料を見ましょうか。

從郡至倭循海岸歷韓國乍南乍東到其北岸狗邪韓國七千餘里始度一海千餘里至對海國・・・絶島方可四百餘里・・・南渡一海千餘里名曰瀚海至一大國・・・又渡一海千餘里至末盧國・・・東南陸行五百里到伊都國・・・(東南至奴國百里)・・・東行至不彌國百里(南至投馬國水行二十日)・・・南至邪馬壹國女王之所都水行十日陸行一月・・・(行程以外の解説は省略)

從郡至倭循海岸韓國乍南乍東到其北岸狗邪韓國

出発点が帯方郡から出てきた。郡が何処にあるかは分かり切つてゐるから書いていない。樂浪郡は平壤、それから別れて出来るのが帯方郡です。その帯方郡(ソウル付近)から出発して、郡より倭に至る。海岸を水行して、韓国部分は南乍(たちまちみなみ)、東乍(たちまちひがし)し、陸行する。その北岸に到る。従来考えでは韓国内は水行とされていますが、私はそうでなく、陸行と理解しています。ルートはほぼ現在の釜山への新幹線や鉄道路線の通つている山と山の間ルートです。その北岸とは、倭の北岸のことです。

始度一海千餘里至對海國・・・絶島方可四百餘里南渡一海千餘里名曰瀚海至一大國・・・方可三百里・・・又渡一海千餘里至末盧國

對海国とは對馬の南半分を中心に浅茅湾あそらのことです。瀚海とは早い海ということ。一大国は壹岐の島ことです。また一海を渡る。末盧國に至る。松浦が末盧國です。

東南陸行五百里到伊都國・・・世有王皆統屬女王國

東南の方向へ陸行出発する。ぐるつと海岸を回ることになります。糸島郡の志登神社辺りと考えられる伊都国へ着いた。

(伊都国にも代々王がいたが、現在は女王国の家来になっている。)

東行至不彌國百里

そこから東に百里行くと不彌國がある。

南至邪馬壹國女王之所都水行十日陸行一月

南に行くと邪馬壹國に至る。そこまで水行十日陸行一月掛かる。

つまり、いきなり邪馬壹国が出てくるのではなく、邪馬壹国に至る方角と里程が付いて書いてある。東京から大阪府豊中に来るのは、いきなり豊中に来るのではなく、鉄道で名古屋まで何キロ、また京都まで何キロと書いてある。大体の方角も書いて有る。ですから、この場合邪馬壹国がどこにあるかというのは、書いてある方角に里程通り行けば良い。ところがこの問題に考えているうちに、とんでもない問題にぶつかつて来ました。今読んだ倭人伝に書いてある距離を足してみます。ところが全体の里数に合わない。加えても全体の里数に合わない。

全体の里数は書いてある。「郡至女王國萬二千餘里」。帯方郡から女王国まで一万二千里とある。ですから全体の里数は一万二千余里と書いてある。ですから各々の数字を足してみ、全体の数字に成ら

なければならぬ。当然ながら。ところが各々の数字を足してみても一万二千里にならない。部分を足しても全体にならない。

七〇〇〇余里	帶方郡治	~	狗邪韓国
一〇〇〇里	狗邪韓国	~	対海国
一〇〇〇里	対海国	~	一大国
一〇〇〇里	一大国	~	末廬国
五〇〇里	末廬国	~	伊都国
一〇〇里	伊都国	~	不弥国
<hr/>			
一〇六〇〇余里	・	合計	

もう一度詳しく言いますと、全体を足してみます。その時注意する問題点が色々あるのですが、二ヶ所だけは書き方が違う。この理解です。

「南至投馬國水行二十日」
「東南至奴國百里」

他は「渡く(距離) 至く国(方向) 行至く国(距離)」等とある。ところが上の二つは「くへ行つて」という動詞が無く、いきなり「至」となる。書き方の様式が違っている。「投馬國」と「奴國」へは書き方が違う。いきなり「至く國(距離あるいは時間)」とある。

わたしはどうも書き方の様式が違っているのは理由があつて、「南至投馬國水行二十日」とは、不弥国から投馬國へ行く行程であつて、もう一度邪馬壹国に行くのに水行が入ってくるはずがない。ですから不弥国から投馬國へ行くのに南の方へ水行二十日ですよ。そういう注釈を加えていると見なした。そうしますと同じ文型が出ているのが、伊都国から奴国に対して「東南至奴國百里」とある。これは東南に百里行くと奴国ですよ。注としてある。そう考えた。

以上奴国・投馬國を除いて、全部加えると一万六百里。一万六百里にしか成らない。つまり一万二千里には千四百里足りない。いや奴国の百里も行路に加えると考えても似たようなものですが、それでも足りない。他の理解でも足りない。私の理解では千四百里足りない。部分部分を加えて全体にならない。そんな馬鹿な話はない。これが解決しないままで「邪馬壹国はどこか。」と私が言つてみても、どうにも成らない。これが解決しないままでは、どうにも成らない。そのように、わたしは考えた。「千四百里。千四百里。」と明けても暮れても考えていた。その間に西宮の米田さんが「どうですか。」定期的に連絡して来られる。イライラするのだけど、どうにもならない。そういうことで過ぎていった。その時は学校は夏休みでした。夏休みがあるというのはありがたいのですが、一生懸命考えても、どうにもならない。それで今日のような八月の暑い時、これはどうも足し忘れがあるのではないか。後から考えたら血のめぐりが悪いものだから、さんざん考えた。

これは、なにか足し忘れがあるのではないか。こう見てみまして、そこで対馬と壱岐の「方」に着目した。

(対馬)

至對海國・・・所居絶島方可四百餘里土地山險多深林道路如禽鹿徑
(杵岐)

至一大國・・・方可三百里多竹木叢林有三千許

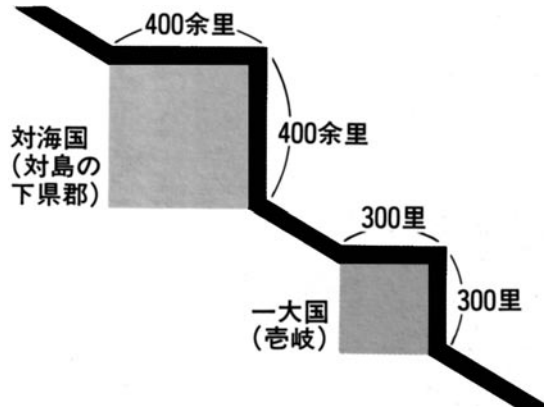
對海國・一大國に「方」とある。そこで有名な「方法」の概念に突き当たった。皆さんは「方法」という言葉を明治時代から英語のメソッドの訳として当てていますが、当てる前から中国では周代から「方法」という言葉はあります。算術の本がたくさんありますが一番古い算術の本として『周髀算経』という天文算術の本があります。この本の話も、話し始めると面白すぎて長くなるので簡単に言いますが、周に周公という人が、貴族と対話している。何を対話しているかという、星の運行について対話している。これは現在の天文学の知識により、今から三千年前、日本では縄文時代後期末のBC千百年前の星座がどうであったかについて、ここで二人が話していることが、裏がとれる。普通は本当で有るかどうかが確かめようがないが、この場合は確認が出来る希なケースです。

その『周髀算経』が出来たのは漢の終わり、集大成したのですが、周代の終わりにすでに「方法」の概念が出来ていた。「方法」とは何かと言えば、土地の面積を示すものである。土地の面積を相当する正方形にあてはめ、一辺をAとし、正方形Aの二乗で土地の面積を示すものである。これだけです。あまり正確とは言えないと思うかもしれませんが。土地の面積は大体ぐちゃぐちゃしている。規格通りの円や正方形の土地はあまりない。ぐちゃぐちゃしている複雑な形の面積を示そうとすれば、どうしたら良いのか。現在の方法でいえば、ぐちゃぐちゃした曲線の方から言えば外接、正方形の方から言えば内接する正方形を作り、これで長さを求めていく。その

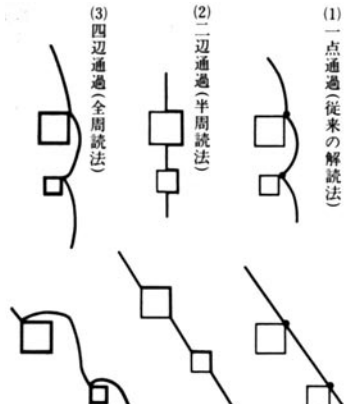
正方形の長さの二乗が面積となる。余り正確とは言えないわけで、ものが全て正方形になるとは限りませんが、余りがたくさんある。それではルーズだと思うでしょうが、実はそれなりに正確ですよ。それでは現在のグラフはどうか。その「方法」の数式化にすぎない。その「方法」という方法の上に立って、あらゆる自然科学は成立している。現在ではこれは有名なフェルマの定理として、「方法の発見」は古代では重要かつ有名な発見である。古代インドにおける「ゼロの発見」と並んで、これなしでは近代科学は成立しない重要な発見である。「ゼロの発見」については、それを物語る本があり、きちんと評価されているが、「方法の発見」については、誰かがそういう本を書いて頂けないかと思っている。

それで元に戻り、その「方法」の概念により面積が書かれている。島の大きさが求められる。これも後になって言えるのですが対馬の對海國は「方四百里余」。杵岐の一大國は「方三百里」。それで對海國の「方四百里余」の方は對馬全体ではなく浅茅湾を含んだ南島ですが、「余」が付いているので強です。杵岐の場合は、何も付いていない。だからドンピシャリか、少し弱である場合は「余」がない。この對海國と一大國は、明らかに「里」で表してあるのに、この二つを従来は全然足していなかった。「里」と書いてあるのにぜんぜん計算に入れてなかった。入れたらどうなるかと考えた。この場合は傍線行程と考えた奴國と投馬國を除外した。その結果をまとめたものです。

『古代史六〇の証言』〔駿々堂〕
証言一八 倭人伝の迷い道 行路解説



『風土記』にいた卑弥呼
古代は輝いていた
周旋問題 朝日文庫



その対海国と一大国の「二辺通過 (半周読方)」として、図の通り二つ可能性が考えられます。上の方が実体に即しています。ですが、どちらで行っても半周ずつ (四百里余 + 四百里余) + (三百里 + 三百里) が里程に入るのではないかと。ぐるりと一回りしますと元は一回りして元に帰る必要はない。

そうしますと、この「二辺の和」を加えることを考えたのは誰か。『三国志』の著者陳寿ですよ。そう考えて「二万二千里余」は計算で出した。これは計算で出さなければ、部分抜きで全体になるということはない。計算なしではハッキリ出ませんから。部分部分なしで総計が出ることはあり得ませんから。それで総計は決まってくる。その総計の出し方が今問題となる。それがいまの千四百里足りないと言うことは、どこか足し忘れがあるのではないか。その足し忘れ、それが今の半周部分 (二辺) である。

七〇〇〇余里	带方郡治～狗邪韓国
一〇〇〇里	狗邪韓国～対海国
八〇〇余里	対海国の二辺
一〇〇〇里	対海国～一大国
六〇〇余里	一大国の二辺
一〇〇〇里	一大国～末廬国
五〇〇里	末廬国～伊都国
一〇〇里	伊都国～不弥国
一二〇〇〇余里	合計

対海国の半周一大国の半周

(四百里十四百里) + (三百里十三百里) = 千四百里

この足し忘れが千四百里である。もうこれには本当に飛び上がった。

お恥ずかしい話ですが、アパートの二階に居ましたが、暑いので真つ裸で居ました。ちょうど妻が一階のところで洗濯をしていました。真つ裸で飛び降りて、妻に「わかった。！わかった。！」と報告したことは忘れもしません。

これが古代史に本気で飛び込み、深入りすることになった瞬間です。これで初めて、部分を足して全体になる。今のようを見ていくと一万二千里になった。

これで初めて「倭人伝は信用して良い本なのだ。」とこう思った。「信用して良い本だな。」とは何をいうかと言われるかも知りませんが、部分を足して全体にならない本を、わたしは真面目に研究することはないよ。そのような不誠実なインチキな信用できない本を研究するために、自分の一回しかない人生を、こんな本の為に使うことは、ばかばかしい。そんなことは言わなかったが内心はそう思っていた。ところが今のように部分を足して全体に成った。当たり前と言えども当たり前だ。これなら信用できる。これなら真面目に研究してよい。わたしがそう思った瞬間だ。

と同時に、この瞬間に実は邪馬壹国の場所は決まってしまった。私はそれ以前は、邪馬壹国の場所を予定していなかった。邪馬壹国の在処を知らなかった。しかし条件的に決まってしまった。

なぜかと言えども不弥国迄で部分部分の里程は終わっている。

先ほど言いましたように帯方郡から出発して、対馬・壱岐を通り、松浦国から東南へ向かい海岸を回って糸島郡の伊都国迄来た。そこ

から伊都国から東に行けば不弥国。不弥国へは普通の書き方で書いて有るから百里東に行くしかない。その不弥国から東に行かない。不弥国はどうみても博多湾岸しかない。当時不弥国が博多湾岸の入り口になるか、博多に近い方になるかは、決めかねてはいたが博多湾岸であることは疑いが無い。従来の研究も不弥国が博多湾岸で有るとしている。そうすると不弥国迄で部分部分の里程は終わっている。今までの考え方で一万六百里になるといったのは不弥国まで。博多湾岸までで一万六百里。ところが今のように「対海国・一大国の半周読方」を導入して千四百里を加える。そうすると不弥国迄で総里程は終わってしまった。一万二千里になった。総里程は博多湾岸で終わっている。ということは邪馬壹国に着いたということ。邪馬壹国に着いていた。

わたしの本『邪馬台国』はなかった』のキーワードは、「不弥国は邪馬壹国の玄関」である。不弥国に着いたという事は博多湾へ入った。邪馬壹国に着いたということです。

わたしは博多が邪馬壹国になろうとは、夢にも思いもしなかった。漠然としたイメージではまだ南の方ではないかと思っておった。その証拠というか、つまらない証拠ですが読売新聞で三回ばかり書いた記事の中では、「博多湾岸の不弥国が邪馬壹国の玄関である。邪馬壹国は博多湾を原点にして、不弥国の南のどこかにある。」と書いたことがあります。(笑い) 私が邪馬壹国の在処を知らないことを示していた。しかし、まさか出发点の不弥国、博多湾が邪馬壹国であるとは夢にも思わなかった。

今から振り返ってみれば、「半周読方」を導入しなくとも博多になるはずだった。なぜならば行路が終わっているのは不弥国迄であることは疑いが無い。足りないのは何かの理由があつて足りないけれどもそこから先は書いていない。先の史料があるわけではない。

博多湾岸までしか史料がない。そうであれば博多湾岸のどこかに「邪馬壹国」が成らなければならない。

このように行程を足して行くと足らない。明らかに不足する。それを今のように「半周読方」が導入されることによつて、「邪馬壹国は博多湾岸とその周辺。」ということに成りました。邪馬壹国は南側と東側は分からない。『魏志倭人伝』は女王国に到着したことで終わっている。女王国が戸七万戸の国であると書かれている。そこで終わっている。南側と東側はどこまで広がっているか書かれていない。書かれていないから分からない。よく読者に「邪馬壹国の範囲はどの辺りを指すのでしょうか。」と聞かれるが、想像ではいろいろ議論は出来るけれども想像にすぎない。『倭人伝』という史料による限りは分からないと言うのが正確である。書いていないから分からない。西と北は分かる。西は糸島側で、北は博多湾である。南と東は分からない。分からないものは分からない。「邪馬壹国は博多湾岸とその周辺である。」と、ぼやかした答えになったのはそういう理由による。

今わたしが言った論理は三十数年足っているが、わたしが、たどった論理を調べた人は誰もいない。古田はそう言ったが、「里程付きで、あれは間違いだ。」と言った人は誰もいない。部分を加えて全体にならなくとも良い。そういう乱暴なことを言う人はいないと思うが、古田以外の方法で「部分を加えて全体になるよ。」と言った人も誰もいない。誰もいないままで邪馬台国、邪馬台国と言っている。テレビも新聞もそう報道している。しかしこれは無理ではないか。

『三国志』には里程抜きで「邪馬台国」とだけ有るのではない。一人歩きしては困る。きちんと里程が付いている。里程を外して邪馬台国が、近畿大和だの、九州山門だと言ってみても駄目なの

である。やはり里程の論証を付けて、古田の論証はこういう意味だめ。里程の論証を付けて、ここが邪馬台国である。そう言わなければ学問としてはだめ。ところが古田の言うような里程の論証に踏み込むと、古田のペースに乗るから止めておけ。はずせ。シンポジウムにも呼ぶな。そして邪馬台国。新聞もテレビも学会も全部そうである。私はそれは「無里の邪馬台国」。そういう「無里の邪馬台国」をいくら言ってみても通るはずがない。明治以後のやり方、短ければ敗戦以後の体制のやり方に無理が来ている。古田のようなことを言い出したら、話がややこしくなると言うので一切無視。今さら戦前のように弾圧は出来ないが、古田が書いたり講演することは許す。一切無視する。無視する方針で来ている。いくら無視しても、今私が言っている道理には、かなうはずがない。無視することが無理だということ、一回聞いたなら誰も忘れることは出来ない。部分を全部足すと全体になる。そういう私の意見の方が道理にある。結局滅びるのは、私の言うことではなくて、「無里の邪馬台国」を言い続けている新聞やテレビや学会、その方が全部の消滅するしかない。消え去つて行くしか仕様が無い。

生意気なようですが、幸い、わたしは青年の時それを経験しました。敗戦までに、明治以後言い続けられていた説が有ったではないか。金科玉条、絶対動かしてはいけない。それに違反すれば弾圧された。そういうことをさんざん聞かされた。ところが消え去つたのは弾圧した体制の方の考えである。私は青年時代、それを見たし聞きました。実は弾圧した体制の方が短いのであつて、消え去ることになる。真実に達する方が強い。私は青年時代それを知つて、やはりそれを疑うことなく来ました。同じように無理を通していても、やはり消え去るのは無理を通しての方である。私はそれを夢にも疑うことは出来ない。

補足

後半を始める前に、先ほどお話しした中の尻切れトンボといえますか、補足をしたいと思います。黒沢明映画の中で最も印象が深かった志村喬主演の『生きる』という映画と関係する件で少し述べたいと思います。西宮の米田さんが定年退職されて引退された後、自宅にお伺いした。そのとき次のような述懐をお聞きした。朝日新聞社に初め入ったときは社会部に入った。ところが結核になった。当時の結核は大変な病気で完全に直らない。入院を繰り返した。そのうち、とても無理だと思うようになった。若い人たちが次々社会部に入ってくるのを見て、自分のように病気をした人間では、とてもそれに互してやっていけない。それで何度も断ってきたけれども、出版局に移るといふ決心をした。新聞社の中では出版局というのは日の当たらないというか、脇道の部局らしい。しかしそこにも救いはある。新聞社の出版局というのは、九割方は新聞に載った記事を収録して本にする。そのために作られた部局である。言ってみれば文字を縦を横にするようなもので単純作業で、面白味も何もない。ところが一割か五割かは自分の企画で本を作ることが許されている。こう聞いた。これに賭けよう。自分はこんな体では一生は短いから自分の企画でこの本を作った。そういう本を作りたい。それが出来たら私の人生は意義があった。そう考えるようになった。そう思っただけで断ってきた出版局へ移ることを決心をした。そして出版局へ移った。それで引退した後、私は幸せな人生を送ることが出来たと思っています。そう語られた。私は二冊の本をだすことが出来た。一つは飛驒のユニークな家屋を取った写真集、高山の写真館の店主が作られた写真集です。その方を知って朝日新聞社から出した本です。現在ではその方面では知られた方になられた。これは私が企画して出版した本とっております。それと一つは古田さんの本

です。『邪馬台国はなかった』『失われた九州王朝』など、これも私がお願ひして企画し出版できた本です。この本を企画し出版できたことを誇りに思っています。

それを聞いて、あつと思つた。わたしのところへ繰り返し巻き返して来て「お願ひします。どうでしょうか。」というぜんぜん動かない姿。ぜんぜん強引ではないですが、誠に強引です。(笑い)「どうでしょうか。」と、また来られる。それに結局負けたというか、その圧力に引きづられて、邪馬台国はどこかという仕事をした。

どつかで見たような姿だと思つていたら、志村喬主演の『生きる』の主人公の姿である。ガンを宣告されて後何カ月かの命をどう生きようかと考えた。役所の仕事のベテランで、役所の陳情を受け付け、いかに陳情をごまかすかという名人になっていた。ちゃんと知つていたのだけれど、今度は本気で取り組んでいった。上司がびつくりする。こんなもの真面目に持つてきてあなたは一体どうするのだ。しかしお願ひします。お願ひします。・・・と言うではありませんか。あの姿です。あれは人間の迫力ですね。大きな声を出すとか、怒鳴るとか、演説をするとか、そういう迫力ではありません。やはり本当の意味で、人間の命を懸けた迫力。わたしはそれに引きずられて仕事をする事が出来た。そういう意味で、わたしのところへ繰返し来られた米田さんのお陰で仕事をする事が出来た。こう思いました。

それから、つまらないことを申し上げますが、わたしが映画の中で夢中になつた映画があります。今回には直接関係ありませんが、一番繰返し良く見た映画が黒沢明の『わが青春に悔いなし』です。もう百回以上見ました。東京でも仙台でも広島でも居るときに映画が来ましたら、繰り返し巻き返し映画館へ行つて朝から晩まで見ました。おそらくわたしの精神に影響を与えているでしょう。

それとおそらく第二番目に良く見た映画が「キュリー夫人」の映画です。キュリー夫人の伝記です。クリア・ガースンという名女優、おそらくその美人の顔に見に行ったのではないでしょう。百回は行かないが何十回となく繰返し見ました。

後になってテレビで放映してしまいましたので、なつかしいと思っ
て見ました。ある箇所にて、思わずアツと叫んだ。映画の三分
の二ぐらい上映されたところがハイライトになっていました。要す
るにキュリー夫人がラジウムから放射能を発見しようとして、すご
い労力で抽出した。何万回も濾過試験を行うのですが、どうしても
数が合わない。全体を足して八という数値になるのに、知られた放
射能を持った物質を測定してみても四にしかならない。どうしても
四足らない。それで非常に悩む。旦那さんとお師匠さん兼同僚です
が一緒に悩む。家で居るとき、夜寝ているときに気が付く。あの中
に有るはずがない。そう思ってゴミ箱に捨てていたゴミ屑の中に、
あの中に放射能があるかも知れない。あそこに有れば、物質の概念
が変わってしまう。それで大学の実験室、倉庫のような雨漏りのひ
どい汚いところですが、そこへ旦那さんと夜中に行き、測定してみ
ると反応が有った。足らない四が有った。ゴミ屑の中に。その瞬間
に放射能が分かった。記念すべき瞬間であり、もしかしたら原子爆
弾が出来る瞬間であったかも知れませんが。この映画のハイライト
感動を生んだところだ。それも関係した。

わたしが倭人伝をやるときに、なぜ「部分を足して全体にならな
ければならない。」ということに執念のようなものを持ったのは、
どこかでこの映画に影響されたかも知れない。やっと五〇代になっ
てから気が付いた。よけいな話ですが、言わせていただきました。

三 「三種の神器」と『倭人伝』

前半で申しましたのは全く文献上の問題、全く文献を史料として
理解するための方法論として述べたわけでございます。その段階で
は、わたしは考古学というものを全く知らなかった。その知識はな
かった。その後考古学的な資料に取り組んでみて驚きましたのは、
この糸島・博多湾岸が、まさに弥生時代の矛・鏡・絹・その他の考
古学的資料の中心的な出土物が集中している。そういう事実を知る
ことが出来たということでございます。

関係する資料をここに揚げておきます。

（編集者注『ここに古代王朝ありき』―邪馬壹国の考古学―朝日
新聞絶版や『古代は輝いていた』―「風土記」にいた卑弥呼を見て
下さい。発掘調査などで、現在の数値は変わっていますが、基本的
な傾向は変わりません。）

A 弥生遺跡出土鉄製武器

大きい武器が筑前三十六です。筑後は二です。やや小さい武器で
は十一が筑前です。筑後は一です。筑前の中でも東域というのは北
九州市、中域というのは糸島・博多湾岸です。その内大きい武器は、
東域が十五、中域が二十一です。やや小さい武器は、東域が一、中
域が二十です。糸島・博多湾岸が最大です。

B 弥生遺跡大型鉄器出土分布図

福岡県が圧倒的です。近畿はほとんどない。

C 日本鉄器出土全分布図

やはり福岡県が百六と圧倒的です。兵庫四十二、大阪二十七、奈良はゼロ。

D ガラス勾玉（弥生時代）出土分布図

（季刊「邪馬台国」29号より引用）

ガラス勾玉鑄型出土遺跡とガラス勾玉出土遺跡です。弥生時代のガラスの勾玉、これは近畿にもあるのですが圧倒的にはやはり九州糸島・博多湾岸が多い。いずれも福岡県に集中しています。とくにガラスの勾玉の鑄型は、糸島・博多湾岸に集中しています。

E 九州における壁の出土分布図

これもガラス勾玉と分けたのですが、いずれも福岡県が圧倒します。

F 日本列島弥生遺跡出土、全鉄器表

工具、農具、漁具、武器、その他と分けていますが、いずれも福岡県が圧倒します。

G 九州における銅矛と銅戈の出土分布図

銅戈と呼ばれるものです。いずれも福岡県が圧倒します。対馬が福岡県と連動している姿を示しています。後は少しである。

H 同じく北九州における銅器の鑄型の出土分布図

銅矛と銅戈の鑄型、いろいろありますが、糸島・博多湾岸が中心です。

I 冢（ちょう、つか）の中から出土した矛の分布図

冢の中から遺体と一緒にとは限りません。外からも出土するケースもありますが糸島・博多湾岸が断然多いのでございます。同じく銅戈の分布図も上げて有ります。

J 漢式鏡（弥生時代）の出土分布図

福岡県が一四九、佐賀県が十一、他を圧倒します。近畿はきわめて少ない。大阪、京都はゼロ。当然近畿は、この時代は銅鐸の時代ですから。

弥生時代では、驚いたことに、何れも九州糸島・博多湾岸が分布の中心でございます。

次にこれが問題の三角縁神獸鏡です。

K 三角縁神獸鏡（古墳時代）の出土分布図

これは弥生時代ではありません。古墳時代である。椿井大塚山古墳の二十九枚を筆頭に、近畿に集中しています。最近では黒塚古墳が椿井大塚山古墳と並んでいます。

それから、注目すべきは絹の出土分布図です。

L 「北部九州に、絹の出土分布図」

倭国製の絹もやはり博多湾岸とその周辺です。特に注目すべきは、ナンバー八の福岡県春日市の須久岡本遺跡でございます。ここだけは中国の絹です。他は全て倭国産の絹です。中国の絹はここだけです。

ついでに申しますが、今度の黒塚で絹が出てきました。もちろん倭国産の絹である。非常に興味深い。被葬者の木棺自身も桑の木で出来ている。これはおもしろい。黒塚に葬られた人は蚕、絹の製法を始めて大和にもたらしたことを誇りに一生を終えた人ではないか。桑の木というのはあまり木棺を作るのに適した木だとは思えない。それをわざわざ葬られた人の気まぐれで桑の木にしたとは思えない。やはり桑の木に葬ることが、葬られた人にとつては本望であろう。多少木棺の部材としては具合が悪いでしょうが、それを越えて値打ちがある。だから桑の木の木棺にした。こう考えて間違いない。事実倭国の絹が出てきた。倭国の絹が出てきたということ。中国ではない。中国から絹が来たのなら、中国の絹が全部ではない。一部でも出なければおかしい。中国の絹は全くゼロ。全くなかった。倭国の絹ばかりである。そういうことは彼がもたらしたのとは中国からでなくて、博多湾岸からである。そういうことは誰も言わないでしょうが論理的にはそうなる。

黒塚以前に、倭国の絹を生産していたのは最初弥生前期から最後後期まで、一貫して博多湾岸である。その中に一つだけ中国の絹があるのが須久岡本遺跡でございます。

ついでながら『倭人伝』の中で一番強調されているのは当然ながら絹のことでございます。鏡については「銅鏡百枚」と四字有るだけですが、絹については文様や色から何回も繰り返し書いてある。飾り絹である錦が中国から送ってきた物の中心であることは明らかである。そして倭国側の卑弥呼・壹与も絹を送っている。中国周辺で絹を生産できたのは倭国だけである。この理由も時間があればお話ししますが、倭国だけは何故か中国で禁制品であるはずの絹を生産している。それを又卑弥呼・壹与も中国に送っている。倭国内でも絹があったことを、また『倭人伝』が証明している。まさに

糸島・博多湾岸の絹の中に、中国の絹を含んでいる。

ついでにご紹介しますが小林行雄さん、日本の考古学の大家です。日本の考古学者はお弟子さんであったり、そのグループの別れであったり、ほとんど何らかの形で関わっておられる。その小林行雄氏の鏡の論文を読み返しているところですが、そこでは必ずしも『倭人伝』は信用できない。何故かというところでは絹が出ない。そういう形で書かれてある。えつとなりました。驚きましたね。もとより日本では絹が出ない。だから『倭人伝』は信ずるに足りない。小林行雄さんが三角縁神獸鏡の伝播の系統図を作られたあの時点ではまだ日本では絹が出ない。博多湾を含めて絹が出ない。それが定説というか通念でした。だから『倭人伝』に絹があるというのは嘘がある。そういう形で『倭人伝』を評価しておられる。これを読んだ四十年前はそういう頭で読んでいたので気が付かなかったのですが、今回改めて読んで、改めて気が付いた。研究のレベルが進んできたという事でしょう。

わたしは純粋に文献の里程解説から博多湾に到達したのですが、今の出土物から行きますと、そのまま考古学的見地からも、そのまま対応していることを指摘させて頂きました。

そしてここにありますのは吉武高木遺跡の発掘報告書からの図ですが、通称は「三種の神器」が出て参ります。『日本書紀』では「三種の宝物」という形で出て参ります。この吉武高木遺跡からは「三種の神器」が出てくるわけですが、南九州の高千穂の峰とか、隼人塚、これは明治以後薩摩・長州の政権が神代三陵として鹿児島県内に決定するした。「治定」と言いますが、そこには決して「三種の神器」は隼人塚には出てこない。

明治時代薩摩・長州の政権が神代三陵を、うがやふきあえず鵜草葺不合尊などの墓

を全部鹿児島県の中に比定した。鹿児島県内に決定した。天皇陵、天皇陵というけれども、一番大事な元祖天皇陵は鹿児島県。それを神代三陵として治定した。これははつきり言って誤り。あの辺りは「三種の神器」は出て来る地帯ではない。隼人塚の世界。

吉武高木遺跡でも分かりますが、「三種の神器」の世界を「二種の神器」や「一種の神器」が取り巻いていなければならない。あれだけ巨大な規模の遺跡である吉野ヶ里でも「三種の神器」は出ていない。剣と勾玉は出たが「二種の神器」の地帯です。鏡は出なかつた。吉武高木遺跡などを取り巻いている「二種の神器」の世界。福岡県と佐賀県の人、どちらを鼻肩ひなかたにするというけちくさい考えでなく、有るものを見て、結果を純粹に判断する。吉野ヶ里遺跡だけが、孤立して存在しているはずがない。

吉武高木・三雲・須玖岡本・井原・平原と同類です。

糸島・博多湾岸、中央が高祖山連峰、高祖山・日向山・クシフル峰・日向峠を挟んで両側に「三種の神器」が出てきます。

一番はじめが吉武高木遺跡。福岡市早良区、室見川の中流域、日向川との合流点にあります。ここが一番早く弥生中期初頭。最古の三種の神器が出るところです。次が三雲遺跡、細石神社さいせきしんじやの西隣にあります。その三雲遺跡の南隣が井原遺跡。少し離れています。有名な原田大六さんが発掘された平原遺跡。それから博多側に戻って太宰府との間南側の春日市の須玖岡本遺跡。中国の絹が唯一出てきたところです。これだけが「三種の神器」が出てきます。

順序からいいますと、

吉武高木遺跡↓三雲遺跡↓須玖岡本遺跡↓井原遺跡↓平原遺跡となり、いずれも「三種の神器」が出てきます。吉武高木遺跡の配置図を見れば分かりますが、そういう「三種の神器」の世界を「二種の神器」や「一種の神器」に取り巻かれている。その一番中央に「三

種の神器」がある。逆に言うとり巻いている「二種の神器」の一端に吉野ヶ里の遺跡がある。

ところで何故かこういう形で論争しないのが不思議なのですが、『倭人伝』も「三種の神器」である。鏡と勾玉と剣。勾玉には管玉のことがありますが、その三つが「三種の神器」と呼ばれている。『日本書紀』では「三種の宝物」として出てきます。これが何故か重要な王権のシンボルとされています。韓国と日本に跨またがっているという問題もあります。

ところが『倭人伝』でも、実はあの内容は「三種の神器」です。何故かと言いますと「銅鏡百枚」と言っているように大変鏡を重視しています。卑弥呼ひみかがお化粧好きで百枚を、お化粧に使った。そんなことはない。太陽信仰の小道具というか、祭りの場で屋外において早朝太陽の光線を反射させて参列者の目を眩ませる。たくさん有ればたくさん反射して、あれば有るほど具合が良い。その中で儀礼を行う。そういう太陽信仰の儀礼の場で使われていたことを示す証拠である。卑弥呼もそうです。「三種の神器」自身が、太陽信仰を強調する儀礼が行われてきた証拠である。

中国ではそうでなくて姿見である。お化粧道具に過ぎない。御婦人の好きな小間物に過ぎない。ですから中国の場合は女子でも男子からでも墓からも出てきますが、一つの墓から二つ出てくることは希である。日本のようにたくさん出てくることはない。十や三十も出てくるのは、お化粧好きの王様であったというのではなくて、太陽信仰の祭祀に、明らかに祭りの場に使っていた証拠である。「三種の神器」は太陽信仰に基づく地帯であり、権力者のいるところだということ。『三種の神器』の一つです。

それでは勾玉まがたまはどうか。勾玉は日本では縄文時代から有る。私の知っている最古の勾玉まがたまは青森県。縄文時代後期に盛んに甕棺みかかんに葬られた

遺体から出てくる。ほとんど女性です。そこに身につけていた装身具から牙玉として存在する。女性だから特に多いのかもしれない。動物の牙を加工して、ほんとに勾玉そっくりの牙玉として出てくる。弥生ではない。弥生より千年以上古い縄文後期。又大分県でも縄文に勾玉があつたことが知られています。あと韓国にも出てきますが古いものは日本特産というべきです。これも「三種の神器」の一つです。

(私は甕棺と呼ぶしないで甕棺と呼びます。)

劍は「三種の神器」としてこれは当然だ。言い方は変ですが、権力者で劍を持たない権力者を私は見たことがない。私は権力者に付き物である。権力者の「権」という字を書き変えて「劍力者」と言いたいぐらいだ。徳だけで頑張つて力を得ました。そう言うかもしれないが、そういう権力者は見たことがない。だいたい権力者は武力を張る基盤に立ち、みんな使っている。先入観といわれるかもしれないが私はそう思っている。縄文時代は石劍があり、弥生にはもとより銅劍がある。劍は当然「三種の神器」の一つである。

そういう三つを加えた「三種の神器」である。ところが『倭人伝』の中で鏡を百枚くれと言うのは異色ではありませんか。鏡に非常に執着を持っている女王ではありませんか。鏡は太陽信仰の祭祀だと思うが、卑弥呼(ひみか)の「ヒ」は、太陽の「日」だと思う。同時に見逃してはいけないのは勾玉が出てくる。

『倭人伝』に「青大句珠二枚」とある。俳句の「句」という字を書いてありますが、これが「勾」という字の本来の正字です。「勾」という字は本来「句」である。「句」と書いても意味は変わらない。だからなぜか大きな勾玉を献上している。中国はびっくりしている。それと注目すべきは、先ほど言いましたガラスの勾玉を献上しています。

「白珠青玉」と有ります。これはガラスの勾玉です。

勾玉を作った形跡は縄文から有る。それと同時に注目すべきは、先ほど言ったガラスの勾玉の鑄型です。これは近畿にもありますが、もちろん近畿より古く、福岡県のほうに集中しています。勾玉は富山県の糸魚川周辺が有名ですが、最初は牙玉として作っています。最初はそれを利用していたのでしたが、それだけでは足りなくなつてというか満足できなくなつて、当時の最高の工芸技術であるガラス製品として勾玉を作っています。そう量産は出来ませんが工業製品であることは間違いない。

だから『倭人伝』では、倭国の中心部でそういう巨大な鏡や巨大な勾玉が作られています。その点から言っても糸島・博多湾岸から出てきます。糸島では巨大な鏡が作られてきた。巨大な勾玉も作られてきた。同時に先ほど言った権力者に付き物の劍も出ています。中国からの劍も有ります。

そうしますと鏡と劍と勾玉。合わせて「三種の神器」。卑弥呼は「三種の神器」の中心の王者。そうすると卑弥呼の居た場所は、弥生時代に「三種の神器」が集中して出てくる地帯となる。

そうすると先ほど言ったように糸島・博多湾岸と周辺以外にない。それ以外に「三種の神器」が集中して出てくる地帯はない。近畿にもないし吉備にもないし南九州にもない。

何回か話しましたが「邪馬台国。邪馬台国は分からん」とずっと頑張つており、みんなもそうか思わされている。大部分はそう思っている。それでは「三種の神器」にあたる遺物が集中して出てくる地帯は糸島・博多湾岸以外に有つたでしょうか。それ以外に「邪馬台国、邪馬台国」と言っているけれども、近畿も中部も名乗りを上げていますが、それでは「三種の神器」にあたる物が何か出てくる地帯はあつたでしょうか。

四 黒塚古墳について

黒塚が示したところは明瞭である。何が明瞭だと言いますと、鏡は一つしか出てこなかった。そんなことはない。そしてたくさん出てきた。そう言いますが私がいま言った意味はお分かりでしょう。棺の内から一枚出てきたのは画文帯神獸鏡だけである。棺の中に一枚鎮座していたのは三角縁神獸鏡ではありません。後漢時代に始まる画文帯神獸鏡一枚だけです。これはもちろん四・五世紀まで作られた鏡です。これが一枚だけ枕元の所にあつた。いわゆる三角縁神獸鏡の方は百パーセント棺の外にある。疑いようのない事実である。そうするとこの墓に葬られた人、葬った人々にとって大事な鏡はどこか。棺内の画文帯神獸鏡か、棺の周りに目白押しに立てられていた三角縁神獸鏡か。先入観のない人なら、中の一枚が大事に決まり切っている。いや外の鏡が大事だ。そう言うならば遺体は大事でないのか。遺体は外に置いてあつたのか。こうなりますよ。

いや鏡は外に大事なものを置くのがルールである。鏡が外でも別に問題はない。そう言っている人がいるが御苦労なことです。それでは先ほどの大事なものの「三種の神器」は棺の外にあつたのか。三雲遺跡の甕棺、私は甕棺みかかんと言いますが、その「棺の外」にあつたのか。有名な福岡県前原市平原ひらばる、そこから割竹形木棺が出てきた。これも「棺の外」にあつたのか。とんでもない。百パーセント棺の中である。大事だから全部棺の中にある。「三種の神器」は棺の中にある。「三種の神器」を軽視して棺の中に置いた。そんなことを誰が言いますか。

三角縁神獸鏡は大事だ。鏡は外に置くのがルールである。それは結論を指し違えているから、説明もそう言わざるを得ないだけである。世界中の人に説明できる結論ではないと私は思う。もし三角縁

神獸鏡が中国の天子から頂いた鏡であるなら、これほど失礼な話はない。こんな貴重なものを「棺の外」に置いといてくれ。こんな失礼な礼儀知らずな男はいない。黒塚の被葬者は傲慢無礼だ。礼儀を知らん人間とみなして良いのでしょうか。私はやはりそのようなこととは言えないと思う。やはりそこに事実にあることから自然な理解をしてゆく。それが前もって決めてあつた結論と、結論が合つてもよし合わなくともよし。無理矢理合うように説明を曲げるのは学問でないと思う。

今度の黒塚の素晴らしいところは、盗掘されずに出てきたことである。今までの発掘された鏡ではみんな盗掘を受けていて破壊されている。元の配置は分からないことが多い。菅谷文則氏が『歴史読本』九八年九月号で、一覽出来る報告書を出されていますが、ところがほとんど盗掘を受けている。平原古墳はすこし違いますが他の古墳はほとんど盗掘を受け、まともな元々の位置で見つかったのは、ほとんどない。ところが黒塚の場合は盗掘されかけたが、なぜか諦めが良く途中で止めた。地震で崩れたところによつて盗掘を止めた。盗掘されないまま、現状のままの考古学的に素晴らしい状態が出てきた。はつきり証拠をもつて考えることが出来る。数かと言えば黒塚古墳にならぶが、椿井大塚古墳の場合はいどい話で、あまりにも有名で当時の国鉄、現在のJRが線路工事のため山を切り裂いていた。そうしたら頭から鏡がばらばらと落ちてきた。これは大変だというわけで京大に連絡した。土曜日でしたが、その時助手で京大に当直で居たのが樋口隆康氏で、新聞社と一緒に出かけられた。そういうことをお聞きしました。このような状況では鏡を持つて帰られた人もおられた。このように現状がどうだったかは、推察は出来るが正確なことは言えない。ところが今回の黒塚は正確に残った。それが素晴らしい値打ちだ。

そういうことから端的に言いまして三角縁神獸鏡は卑弥呼が中国から貰った鏡でない。なぜならばその他大勢扱いである。先入観なしに理解するとそう言わざるを得ないと思う。

それでは三角縁神獸鏡が中国から貰った鏡でないとなると、それでは邪馬台国は何処にあるのか。また霧に包まれている。そういう報道がおこなわれている。三角縁神獸鏡が魏の鏡でないと語っている人たちがさえも、よけい邪馬台国が分からない。そういう議論が盛んにされている。私から見ると先ほどの図のように「銅鏡百枚」とあるのだから鏡がたくさん出る地帯でなければならぬ。それが常識ですよ。鏡がたくさん出るところは二カ所しかない。漢式鏡を取れば、博多湾岸とその周辺に集中している。また三角縁神獸鏡を取れば近畿が中心であることも疑いようがない。

だから三角縁神獸鏡が黒塚の出現によって、卑弥呼・壹与が中国の天子から貰った鏡ではない。西晋から貰った鏡ではないとなりましたら、やはり鏡は博多湾岸とその周辺になる他はない。それを誰も言わない。それを言ったら古田を呼ばなければならぬ。古田は退けておけ。相手にするな。対談にも呼ぶな。そういう最中である。いくらそんな事をして駄目です。事実は変わるわけではない。(他に鏡があるわけではない。)

五 金印の解釈の間違い

これは結局金印の解釈が駄目だという問題である。「漢の委の奴国」という読み方をしていることが問題である。以前は「漢の委奴国王」という読み方をしていた。江戸時代はそれが主流派です。それが明治時代、現在茨城県筑波にある教育大学、昔の高等師範の

教授であつた三宅米吉という方が「漢の委の奴国」という読み方をした。その読み方と博多湾岸が那の津と呼ばれ「奴(ナ)」に当たるから良いとなつた。こういう理由です。しかし「漢の委の奴」という読み方は具合が悪い。「AのBのC」という「三段読み」という読み方をした印は中国にはない。当然ながら与える中国の方がA、与えられる方がBで「AのB」という例しかない。私は『失われた九州王朝』という本で色々例を上げましたけれども、これが通例であつて、まして金印ならば途中に変な人間が入ることは有り得ない。やはり「漢の委の奴国」という読み方は出来ない。「漢の委奴(イドもしくはミコ)国王」と読んだ方がよい。「委」は倭人の種族という意味、「凶奴」と同じ「奴」はグループの意味で、「委奴」は倭人グループ。だから「漢の委奴国王」は、倭人グループの中心の王者が博多湾岸にいたことを意味している。

ところがそれを「漢の委の奴国」という読み方を教科書に載せてしまった。載せてしまったということは博多湾岸を「奴国」に決めてしまった。「奴国」というと『倭人伝』では三番目の国。『倭人伝』では一番目の国は七万戸の「邪馬壹国」、二番目の国は「投馬国」は五万戸、そして三番目の国である「奴国」は二万戸の国である。一番目の七万戸に対して、がた落ち二万戸の三番目の「奴国」を「なこく」と読んで、博多湾岸に決めてしまった。だから「邪馬台国が分からない。分からない。」というのは正確ではない。分かっている知識が一つだけ有る。「邪馬壹国」で無いと理解している地帯が一つだけ有って博多湾岸である。がた落ちが三番目の「奴国」である。もしそうなら弥生期には女王国の「邪馬壹国」や「投馬国」には、がた落ち三番目の博多湾岸の「奴国」より何倍かの「三種の神器」が出てくる地帯がなければならぬ。しかしそんな所は日本国中、どこを探してもない。どこもないから分からない。それは三宅米吉

の「博多湾岸が奴国だ。」という考えが間違っている。光武帝の終生のライバルであった猛々しい種族という意味の「匈奴」、それに対して従順な種族であるという「委奴」という呼び方を、倭にした。その「委奴」の中心地が博多湾岸というだけです。それを「奴国」に、博多湾岸に決めてしまったために、今更「邪馬壹国」には出来ない。

考古学の編年がありますが、これは考古学者の仮説なのです。考古学者が色々考えて、弥生中期を紀元前百年から紀元百年と考えて、『倭人伝』の三世紀では無いと考古学者が仮に当ててきた。考古学者も権威者と言っても人間ですから、人間のやつていることです。一度決めたら絶対正しいということはないはずだ。やはりそれが出土遺物の状況や文献解説に合えば正しいし、合わなければ人間の立てた仮説は、もう一度考え直すのが仮説の仮説たる由縁です。絶対であってそれを押しつける。考古学の編年を受け入れない奴は相手にせん。古田の言うことは相手にせん。そういうのは学問とは言えないと思う。今の考古学者の決めた編年に合わない。そういうことがある。それは先ほど言った博多湾岸を「奴国」と決めてしまっている。そのために身動きが取れなくなった。身動きが取れなくなつたときは、今の大前提にしているテーマに、どこか間違いがあるのではないか。もう一回疑ってみることが学問である。先ほどのキューリー夫人だって、ゴミ箱に捨てたと言うことは、当時の物理学の常識からみれば絶対にそんなものに、放射能が有るはずがなかった。しかしそれを大前提にしてはいけなかった。もしかしたら有るはずのないあのゴミ箱の中に全体の半分の四も有るのではないか。そして調べたら有った。放射能数値の全体の八という数値の半分が有った。それが分かったのが輝かしいキューリー御夫妻の業績の記録だった。

それに対して、考古学は博多湾岸を「奴国」と決めている。「邪馬壹国」でないことはみんな決めてきたのだ。考古学の編年からみて三世紀と違うのだ。だからそれは動かさない。それを動かさないままで、みんな考えようというやり方を、考古学がしていることに、わたしは問題があると考えています。

六 中国の鏡

さて次の問題に行きたいと思います。

『洛陽晉墓的發掘』

(中華人民共和国河南省文化局文物工作队第二隊一九五七年)

これは『洛陽晉墓的發掘』と題する中国側の考古学の発掘報告書です。そのポイントの所をコピーしたものです。

洛陽の晋から出てきた物、この晋は西晋のことです。東晋は後の時代で南京に都が移ります。洛陽が都だったのは西晋です。その西晋で発掘された墓のものをまとめた報告書です。

その中で大事なことは、中国の墓に年代が書いて有るものが出てきた。有り難いことです。日本の墓にはなかなか年代が書いていないので困る。そこに年号が書いてある墓誌銘が出てきました。太康八年(公元二百八十七年)、元康九年(公元二百九十九年)、四世紀に入りまして永寧二年(公元三百二年)。この三つの年号が出てきた。

(注 公元とは西暦のことです。)

そこから出てきている鏡を見て下さい。この鏡は、一人が全部持っているわけではありません。一人一枚が原則です。多くのお墓から出てきたものをまとめたものです。

日本の考古学者は、この墓は西晋の墓であるから魏の墓ではない。そう言いますが、大きな間違いだと思ふ。

それは『三国志』を書いたわたしの尊敬する歴史家である陳寿が死んだ年は、元康七年（西暦二百九十七年）です。ところが先ほど言いました三個の年号。太康八年は二百八十七年、これは陳寿の死んだ十年前。元康九年は二百九十九年、これは陳寿の死んだ翌々年だ。もう一人の永寧二年というのは三百二年、陳寿の死んだ五年後だ。と言うことは、ここに葬られた人は皆陳寿の知り合いだということ事です。同じ洛陽で死んでいる。しかも年号が書いてあり、ここに葬られる人は庶民ではない。陳寿の顔見知りの貴族か、官僚の墓なのです。その人達の鏡が、ここにあるという事は、日常顔を写していた一番馴染みの鏡。それを一緒に葬ってあげましょうと墓の中に入れた。ここにあげてある鏡はそれなのです。陳寿と同時代の人が身辺で使い続けていた鏡である。陳寿はもちろん魏の時代に生きていました。これは有名な話ですが、陳寿は生まれた時、蜀に生まれた青年だった。蜀が滅んで魏に來た。魏の宰相に取り立てられて史官になった。魏の時代はずっと洛陽で過ごしている。もちろん魏から西晋に変わる。その西晋の時代に『三国志』を作る。作り終わったときにボスが失脚して、一度『三国志』は日の目を見なかつた。やがて死んだ後、まもなくボスのライバルが失脚して名誉回復した。そして『三国志』が正史と認められた。そういう有名な話がある。その辺の経緯をみんな知っている人々の墓である。わたしが何を言いたいかお分かりでしょう。つまり『三国志』に書いてある鏡は、この類の鏡である。ここには三角縁神獸鏡は全くない。ここにあるのは前漢式鏡もしくは後漢式鏡しかない。当たり前のことで、後漢が滅んで魏になる。しかしこれは「禅讓」である。禅讓ということとは、後漢の天子は第一の家來に天子の位を讓つた。第一の

家來が天子を名乗つて魏という国号を称する。言つてみればトップが変わつただけで後は全員同じ。實際の所はそんなきれいな事ではないと思ふ。推測ですけれど後漢の天子は座敷牢等に押し込められて、変なことを言われたら困るから囚人同様になつていたと勝手に推測する。そして第一の家來が、うやうやしく天子の位についた。その後余計なことを言わせないために後漢の天子を処刑した。それが本当のところだろう。しかしそれは実体であつて表面上は、世間に公布する大義名分は、徳の高い後漢の天子は自分の息子に天子の位を讓ろうとせずに、その代わり第一の臣下である曹氏に天子の位をお譲りになつた。なんと目出たいことではないか。そういう公布が出てくるはずだ。そういうことは、魏の人たちが魏の時代に身辺に使つていた鏡は、全て後漢の時に作られた鏡に決まつている。それを魏になつたから後漢のデザインは全部止めて、新しく魏らしいデザインに作り変えなければ承伏しません。そんなことは言うはずが無い。また魏から西晋も同様である。西晋になつたから魏の時代のデザインは全部止めて、新しい西晋のデザインに作り変えなさい。同じ条件の禅讓ですから、そんなことは言うはずが無い。わたしはこれを机の上の理屈で言つていますが、それを実証するのがこの発掘報告書です。つまり西晋の終わりに亡くなつた人達のお墓から出てきた鏡は全て前漢鏡・後漢鏡を愛用して死んでいます。わたしの今言つた推量が、推量ではない、事実であるということを確認してあります。そうするとやはり卑弥呼が貰つた時の鏡も前漢鏡・後漢鏡であると考えざるを得ない。この時の鏡が集中して出てくるのは、やはり糸島・博多湾岸の鏡である。この基準尺を取るという考え方からしても、やはり糸島・博多湾岸であると考えざるを得ない。

七 三角縁神獸鏡は国産

さらにもう一步論証を進めたいと思います。皆さんはあまり古代史については詳しくない方という前提ですが、それでも最近は何新聞も色々書いていますから、色々な知識や認識をずいぶんお持ちだと思います。たとえば、しかしどうも「景初三年」鏡、「正始元年」鏡、「西龍三年」鏡などがでてきた。そういう魏の年号の鏡は皆近畿に集中しているのはどうだ。だから古田はそう言うが、やはり「邪馬台国」は近畿ではないか。近畿の新聞もそういう形で書きなぐりますので、そう思われる方も多いと思う。その問題に対し現在のわたしの考え方を、率直簡明に、ズバリ述べたいと思います。

たとえば島根県から出てきた「景初三年」の銘の入った鏡はあまりにも有名でございます。わたしは、この鏡は島根県もしくは周辺で、景初三年の時点に作った鏡である。この鏡を作ったのは中国から来た工人が、日本に来て景初三年であることを意識して祈念して作った物であると考えます。同じく「正始元年」鏡、ズバリ正始元年にその鏡を作った。群馬県で出てきたものはおそらく近畿で作ったものが伝えられたとおもう。もちろんこの場合、全ての鏡がそうかどうかは分かりません。後で複製をダビングするやり方もありますから。全部とは一概に言えないと思いますが、「正始元年」の元の鏡、原鏡はその記載された年に作られた鏡と考えています。その証拠に有名な「景初四年」鏡という鏡があります。なんと中国ではこの年がない。中国では景初三年でストップして正始元年に変わった。だから本当なら景初四年というのは無いはずだ。しかし島根県から「景初四年」鏡は出てきている。これを洛陽近辺で作ったとは考えられない。しかし日本列島は離れている。中国は広いから何百キロと離れると、年号が変わったからといって直ぐ伝わるとは

限らない。だから当然去年が景初三年だから、今年を景初四年と考えて鏡を作った。そういう意味で非常に貴重な鏡である。

これに対し最近も日本の学者の中で、中国内部でも木簡などで、年号が変わっても前の年号を使った形跡はある。中国洛陽近辺でも、そうだから別に問題にならない。わたしは「景初三年」鏡問題は論文に書いたことはないが、そういう議論が有ります。つまり「景初四年」鏡が出てきたからといって鏡が国産とは限らない。そういう議論は古くは三木太郎さんなどがそう言っておられ、最近でもそういう事を言っておられる方がいると聞いています。

この考えは、わたしにとつて非常に問題が簡単明瞭です。木簡等に出てきた話と、鏡に出てきた話はぜんぜん質が違う。何故かというとな簡は荷札です。荷札に書くというのは言うのは、荷札を扱うような労働者・下級官僚が書くわけです。その場合年号が変わっているのに前の年号を書いてしまうというものは有り得ると思う。そんなことをいちいち咎めて、けしからんと言うほど少なくとも中国の権力者は度量は狭くはないと思う。悪意はないから。しかし今の問題は、鏡は中国洛陽の工房で作る。しかも天子が卑弥呼に渡して寄こす鏡である。工房には監督する工人がいる。工房や監督する役人にとつては年号が変わったという事は大事件だ。今年三月に景初三年から正始元年に変わった。そういうことを監視するのが監督の重要な役目の一つである。それをサボって、せっかく天子が年号を変えたという通達を出しているのに、役人や監督が知らん顔とするというのは、わたしは考えられない。また仮に間違った年号の入った鏡を作ったとしても、当然それは検品するわけです。検査すれば分かる。そのまま外に出すわけではない。間違ったならもう一回鋳潰して作り直せばよい。天子が倭国に送るといふ鏡は少なくとも国交の道具だ。年号が間違っている物を、それを見過ごすほど中国は

馬鹿だ。そういう見方をするのは失礼である。ですから洛陽の天子の工房で作ったものを卑弥呼に与える。これが動かない以上、そこで「景初四年」鏡というのには有り得ない。ですから木簡の例でなく他の例を上げて説明して頂きたい。わたしはそう考える。中国へ留学された滋賀県立大学教授の菅谷文則さんとお会いしたとき、同じことを言っておられました。まったく同意見です。

ですから「景初三年」鏡、「正始元年」鏡、「青龍三年」鏡。何れもその時点で倭国側で作られた国産です。

今の問題はみんな気が付いている問題だと思いますが、もう一つ誰も言わないですが不思議な話が「青龍三年」鏡という鏡にありません。この鏡も有名でこの間は大阪府高槻市、以前は京都府から出て参りました。青龍三年（二百三十五年）は、景初三年（二百三十九年）の四年前です。この鏡を見ると倭国側の要請によって、特注で中国にない形式の三角縁神獸鏡という鏡を作ったと仮定します。三角縁神獸鏡が舶載鏡説の人はそう言っていますから。この場合、卑弥呼初遣使以後の「景初三年」銘が有るのは分かる。そして次の景初四年に当たる「正始元年」銘も分かる。分からないのは四年前の「青龍三年」銘がある鏡がなぜ現れるのですか。あれも三角縁神獸鏡です。あの三角縁の様式は特注の鏡だと言いますが、それがなぜ四年前に洛陽で作ったはずの「青龍三年」銘の鏡が、なぜ三角縁なのか分からない。中国鏡で有ると説明する人が、どういう説明をするか知りませんが、わたしには理解できない。

ともかく「景初三年」「景初元年」「青龍三年」などの銘の鏡は国産である。わたしはそう考えています。

『魏志倭人伝』の記載通り卑弥呼が使いを送ったのは景初二年のほうが正確だと考えています。後代の唐代の史料では景初三年とありますが。とにかく、ここでは一応景初三年とします。

その場合、大変な問題がある。わたしは国産の鏡がまず作られたのは当然糸島・博多湾岸である。まずこう考える。

先ほど言いました吉武高木遺跡（福岡市早良区^{はやら}）。これは多紐細文鏡で、漢式鏡ではなく古い段階の鏡である。ところが、その後の三雲以後の鏡はすべて前漢式鏡・後漢式鏡である。これも結論から言いますと、たとえば平原から多くの後漢式鏡が出ていますが、わたしはかなりの数が国産であると考えています。舶載ではない。それは八咫^{やた}の鏡と言われるあの大きい鏡は国産鏡である。それは有名です。あんな大きいのは、中国にはないし文字もない。あれが国産であるというのには余り異論がない。そうするとあれよりもっと作りやすいのは後漢式鏡である。そっくり、さんは現物を鑄型に粘土に押しつけければ良い。すぐ出来る。そっくり、ほど作りやすい物はない。八咫の鏡のような鏡の形自身は、中国に原形があり八葉鏡という鏡です。しかしそれほど大きくはない。だいたい中国の鏡は皆小さい。十五・六センチ程度である。小さい理由は後で申し上げますが、その小さい鏡を拡大して大きなものを作るのはかなりややこしい。鏡を拡大するという作業自身が面倒だし、拡大した物の鑄型を作って鏡を作ること自身がかなり工芸としては面倒である。それに対して大変簡単で作りやすいのは、実物があつて、それにそっくり、さんを作って下さいといえ、大変簡単である。粘土に実物を押しつけて鑄型を作ればよい。一回作ってまた複製を作って作り直しても良い。こんなに簡単なことではない。だから平原で八咫の鏡だけ国産鏡で後は舶載鏡であるという考え。それは実は間違っている。論文にまだ書いたことはないから詳しくは言いませんけれども、結論をまず言わせて頂いた。

（注 この問題の説明は『古田武彦九八年講演集』にあります。）
同じく立岩の鏡、これは見事な鏡である。中国から来た調査団が

この鏡を見て、こんな素晴らしい鏡は中国で見たことはない。そう賞賛されたことを管理人の方からお聞きしました。証明出来る詩もある。中国にないほど立派である。このことは非常に意味があると思う。中国にもこのような鏡は有ることはある。同じデザインや漢詩が並んでいる鏡はあるが、しかし中国にないほど立派である。なぜかという中国では、鏡はたかだか姿見である。しかし日本側では権力のシンボルです。三種の神器の一つです。だから工人は中国の洛陽及び帯方あるいは江南から、最高の待遇をしますと呼んで来た。一年に何枚か作れば、後は寝て暮らしていても結構です。そう言われてやって来た。そういう実に結構な御身分。だから

注文された鏡を精魂込めて良い物を作った。中国にない立派な鏡になつて当たり前である。私がそのことを論じましたのは、立岩の鏡はどうもおかしい。そこに漢詩が書いてある。しかし漢詩の韻を踏んでいない。元の詩は分かっていますので何処がカットされているか分かる。確かに鏡の周りに入れるのですから文字の数は制限されますから、漢詩の全部を入れられないことは確かです。カットしてもかまわない字がある。たとえば「而」や「之」など、有つても良いが、無くても意味は変わらない。そういう文字は残っている。ところが最後の文字は韻を踏んでいる。その最後の韻を踏んでいる文字をカットする。中国人はそれは出来ないと思う。芭蕉の俳句でも「古池や蛙飛び込む水の音」というから俳句に聞こえる。「古池蛙飛び込む水の音」では、意味は変わらないけれども俳句に聞こえない。やはり「や」が無いと具合が悪い。中国人も同じである。中国人は詩のリズムを重視する。「トントン、チチ、…」など彼らにとつて、一番良い響きである。それがなければ詩には感じられない。居心地が悪い。韻の部分が大事である。そこがカットされている。だからあの鏡は中国製ではない。こう見てる。日本人は文字をひつく

り返して読むから関係しない。以上立岩の全ての鏡が中国製ではあり得ない。

このように、先ほど言いました糸島・博多湾岸の前漢式鏡・後漢式鏡の中には間違い無しの中国鏡もある。たとえば三雲遺跡から出た鏡、博多の聖福寺に一枚残っていますが、これは文句無しの中国鏡です。そういうのもありますが、平原などで倭国側でダビングした鏡もかなりあると考えています。そういうダビングした鏡の方が「景初三年」鏡、「青龍三年」鏡より古い。もう倭国側に鏡を作る技術はあつた。しかし中国側に鏡が欲しいと言つて百枚を要求している。

そういう状況の中で近畿に大事件が起きた。次回のお話になりますが神武東征。これを歴史学者は架空だとみんな言っているが、わたしは神武実在と考えるのは歴史は分からない、そういう立場です。神武は九州王朝の分派で、近畿の銅鐸圈に侵入した。そういう立場をとります。その証拠は色々ありますが、その一つに奈良県で弥生の中期までは銅鐸がたくさん出ている。それが後期になると銅型を含め出現しない。ゼロである。小林行雄氏などは、統一権力が発生したから銅鐸を祭る祭祀を止めただけだと言っています。それなら銅鐸に代わり、鉄なり銅などの銅鐸以上の祭祀の道具が出なければおかしい。しかし弥生後期には銅鐸以上の祭祀の道具の遺物も銅型も出ない。私は統一権力が発生したから廃棄したという仮説は、成り立たないと考えています。

とにかく神武は筑紫の九州王朝の分派として、近畿に入ってきて新たな分家王朝を作った。大和政権を作った。そう考えます。そうしますと近畿では銅鐸を作るのはペケにした。銅鐸を作るのは大変な技術である。わたしは銅鐸を作るのも中国の工人がお師匠さんとして関係していたと思う。それはともかく、あんな面倒くさい物を

作る技術があるのだから、銅鐸を作るのに比べれば鏡を作る方が簡単だ。現物があればなお簡単だ。その技術を持った人たちが、景初元年に「景初元年」鏡を、景初四年に「景初四年」鏡を（近畿で）作った。そう考えています。

こういう考えは考古学の編年に大きな影響を与えるかも知れません。従来弥生時代が有りまして、その弥生時代が全部終わって古墳時代になる。こう考えています。しかしわたしはこの考え方に疑問を持つている。何故かという、古墳というお墓は大変顕示欲の強いお墓である。死んでもからも目立ちたい。第二に周辺の民衆に見て貰いたいのです。侵略の民衆に対するシンボルである。自分たちが支配者であったし、その子孫が今も支配者であることを忘れるなよ。そう言っている。しかしその古墳の下には、何も無かったのか。ただの原野の所に廃物利用で古墳を作ったとは、わたしは考えられない。やはりその前の弥生時代の、在地の有力な首長のお墓があったり、聖地があったりした可能性が高い。それを古墳は押しつぶし、今までの権力者を崇めることは許さん。そして新しい権力者の墓を作り支配を見せつける。いわば支配と征服の論理が、古墳という形で貫徹されている。基本的にそう考えています。そういう意味では銅鐸圏に対する支配と征服の早く行われた地帯ほど、古墳は基本的に早く使用された。従来弥生時代がありまして、ずっとあり、その弥生時代が全部終わって素直に古墳時代になる。このイメージは再検討されるべきであると、わたしは考えています。この考えは副次的に色々問題を提起します。

以上「景初三年」鏡、「青龍三年」鏡などは国産である。その時点における国産である。もちろん後のダビングのケースや作り直しもありますよ。たとえば最初有名になった大阪府和泉市の黄金塚古墳の画文帯神獸鏡の「景初三年」銘、確かに鏡の銘はそうなっ

ているが、古墳自身は明らかに四世紀後半である。そういうことを疑う人は当ても現在もいません。当時わたしはこれを分析したことがあるが、どうもこれは本来の鏡でなくて作り直しである。文字は金偏の「銘」という字がどうも中国の文字ではない。こういう字は中国の漢文ではまず無い。またこういう重なつた書き方をするのは韓国・朝鮮系の文字によくある。有名な七支刀もそういう書き方がされている。どうも韓国系の工人がこれを作ったのではないか。そういうことを論じたことがある。さらに島根県で出てきた「景初三年」鏡は文章が長い。その鏡の詩のさらに要約というか、縮めて簡略化した文字であり、デザインとしては島根県で出てきた「景初三年」鏡をきれいにしたのが黄金塚古墳の画文帯神獸鏡ではないか。言わば改ざん鏡に当たる。これは当然有り得る。こういうことも先ほど言いましたように進展すれば有り得る。

それよりも研究の基本原則をしつかり建てる。考古学の編年と言いましても、はつきり言いまして物自身に年号が刻んであるものはない。そうすると年代を考えるのに一番良い材料は『倭人伝』である。『倭人伝』ほど日本列島に関する詳しい史料はない。そうすると『倭人伝』を基盤にして年代を考えていく。これをもう一度やり直さなくてはならない。あらかじめ自分たちで勝手に考古学の編年を決めて置いて、それと『倭人伝』が合わない場合、『倭人伝』が間違えているだろう。『倭人伝』を少しこう解釈したらどうだ。そう言つて『倭人伝』に注文を付けるのは筋道が違っている。

『倭人伝』という貴重な史料を基準にして、又中国の西晋時代の洛陽周辺から出てきた鏡を基準尺にして問題を考える。世界の学者に示せば、当たり前と言うでしょうが。それ以外のどんな方法があるのか。そう反問されるに決まっている。そういうナチュラナルな方法から再出発すべきである。それが今日の結論でございます。

質問

どうかご遠慮なく、なんでも質問して下さい。わたしは何を聞かれても困らない。何を生意気を言うかと言われるでしょうが、ぜんぜん生意気ではありません。聞かれて知らない場合は、「知りません。」と答えますので、なにを聞かれても困らない。当たり前でしょうが知っていることだけを答える。そういう立場を厳守しています。また「こんな幼稚なことを聞いて笑われるのでは。」と思われる方がいますが、そんなことは全くご心配にならずに何でも質問して下さい。わたしは偉そうに言っていますが頭が固いので、半歩前進させて頂くのは、そのような質問が、わたしを導いて頂いています。その場で回答できるかは別にして、遠慮なく御質問下さい。

質問一

『倭人伝』では「銅鏡百枚」と載っていますが、三角縁神獸鏡でないとなると、先生のお考えではどのような鏡か。

(回答)

『倭人伝』では銅の鏡であるということしか分からない。それから「百枚」という非常に多様で有るということぐらいしか分からない。さらに分かるとすれば卑弥呼のほうは、お化粧道具でなく太陽信仰のお祭りの道具等の目的をもって要求したのであろう。そういうことまでは分かる。しかし『倭人伝』では鏡の種類は書いていないので分からないというのが正解です。それに対してここで答えが分かる。つまり『三國志』を書いた陳寿と同じ時期に死んだ人が持っていた鏡が発掘されて出てきた。洛陽の西晋の墓から出てきたのは前漢式鏡もしくは後漢式鏡である。そうすると卑弥呼の貰った「銅

鏡百枚」の鏡は前漢式鏡・後漢式鏡ではないか。前漢式鏡・後漢式鏡が出てくるのは、今の糸島・博多湾岸、これが基本的に中心です。

質問二

私は中学生時代から三角縁神獸鏡を写真でしか見たことがありません。前漢式鏡・後漢式鏡のことは知りませんでした。それでは前漢式鏡・後漢式鏡がなぜコピーされなかったのか。百枚も頂いたなら、それをもつとコピーして鑄型にとつて、ばら撒くけばもつと権威が上がったのではないか。どうなのでしょう。

(回答)

実に良いところを質問して頂きました。時間の関係で省略したところを質問して頂きました。

まず三角縁神獸鏡というものは日本側にとつて非常に有効である。まず最初にそのことを申し上げたい。

昭和二十八年樺井大塚古墳発掘調査報告書

(発行京都府山城町一九九八年三月)

樺井大塚古墳の報告書を見て下さい。京都府山城町の町起こしの目的で作られた報告書です。昭和二十八年に発掘された古墳の正式の報告書が、やっと一九九八年に作られた。

その報告書の鏡の断面図をご覧ください。上の三つは三角縁神獸鏡ではない。それから下は三角縁神獸鏡です。断面から見ると明らかに三角縁になっています。

この場合よく御覧下さい。真中にひもを通す鈕という穴があります。文字は「紐」の字に糸編を金偏にしたもので、「ちゅう」と言います。この鏡を重ねて納めるとします。重ねるとき、平縁だった

らその鈕ちゆうがあると重ねる時、重ねにくいと思いませんか。真ん中が突き出していて平らでは、縁がなければ反つていないと重ねにくいですね。全く反つていなくても収納するとき布で包みますから縁があれば重ねやすい。加えて三角縁があると重ねやすい。日本人は重ねるのが得意である。収納するときはどうしても重ねた方がよいと思いませんか。銅鐸ちゆうたつだって重ねてある。中国などの場合は姿見だから、たくさんいらさないから重ねる必要はない。しかし日本の場合には太陽信仰の祭祀に使うから、多ければ多いほど盛大な儀式になる。たくさん有った方がよい。たくさん現場で使う。現場で使う時は広げて使いますが、終わると広げて収納するわけにはいかない。重ねて収納したほうが都合がよい。三角縁だとその方が都合がよい。効率からいって間違いない。今までそういう見地から三角縁を論ぜられていた形跡がないのが不思議である。小学生でも聞けばそう思うと答えると思いますが。

重ねるだけではない。今言ったように太陽信仰の祭祀に使う場合、野外で写すのは人間の顔でなく太陽の顔である。そうすると台に置いても平縁よりも三角縁の方が安定している。布を敷いても同じである。いわんや古墳の木等に吊るして、太陽が昇ってくるのを反射させるときは、三角縁の方が固定するのに都合がよい。中国の部屋の中で使う場合は姿見だからそのような心配はない。壁に掛けて使っても良い。仕舞うときは箱に入れて収納すればよい。それで収まる。日本の場合、平縁よりも三角縁の方が安定している。そういう問題もある。

さらにより重要な問題は、中国の場合は直径一五、六センチの大きさが大部分である。二二、三センチの大ききの鏡は一部である。日本の場合には二二、三センチの大きさが普通である。黒塚の場合も同じである。平原ひらもそうである。平原の場合には特に大きな鏡がある。

これはどういうことを意味するか。

皆さんは展覧会場で御覧になるが、あまり手にとつて御覧になつたことはないと思います。女性の方が、姿見としてお使いになるのは鈕ちゆうに紐ひもが付いてある。そこへ指を二、三本通して、他方の手で櫛を持つたかたちとなる。一五、六センチなら片手で持てるが、二二、三センチの大きさでは難しい。だから姿見の小間物の実用品としては、一五、六センチ。お墓から出てくるのは圧倒的にそういうものである。だからそれでは中国でも、二二、三センチの大きさの物はあるのかと言いますと、二、三割程度はある。私の考えでは中国でも壁にかけて使う場合、そのほうが都合がよい。面積が広いから。机などにかけて、少し離れて見る場合などは大きい方が便利である。その鏡が、御本人の部屋にあつたから一緒に葬つてあげましようとなる。ところが日本の場合には二二、三センチの大きさが普通である。それでは部屋の中ばかりで使つたのかというと、そうではなくて太陽信仰の道具に使うから、より大きい方が意味がある。多数の民衆を対象に反射させる。そういう祭祀に使つた。

ついでながら蒲生君平が言つた前方後円墳。前方後円墳というのが、前、後ろと言うのは、あれは間違つている、逆であるということが判つていきますので、方台付き円墳という方が正しい。あるいは後台付円墳とすべきです。前方後円墳という言葉を使いますと、これも韓国へ行つて、「日本のほうでは前方後円墳と言っているが、あれはとんでもない間違いである。」と言われます。現に韓国の博物館ではそういう解説が付いてある。我々の方は蒲生君平以来の口調で慣れて言つていただけであるが、韓国側は知つている。韓国側に「独りよがり駄目である。」と批判されている。とにかく方台付円墳とか、方円墳という方が正確である。それでは、なぜ台が出てきたかという、わたしは鏡を使つての儀式が、台の上で行われたと

考える。その場合平地で鏡を使う場合と、台の上で鏡を使う場合とは、太陽の反射の領域が幾何学的に広がる。ぜんぜん違う。台が高くなるほど、多くの民衆を集めて反射させ幻惑させる。それで台が上にあがったと基本的に理解しています。

こういうことで三角縁神獸鏡は、基本的に国産で作られ、実際に台の上で使う場合や収納する場合という日本の実用に応じて作られた鏡である。

ただしこの鏡を作るノウハウは中国自身にあった。中国の場合は縁は画像鏡だけしかない。画像鏡というのは將軍が遠征して手柄を立てて帰ってきた。その遠征の姿を刻んで作った物である。その鏡を部屋に飾って悦に入っている。そういう類の物である。そういう場合縁縁を考えてみて下さい。絵が問題だから縁はいらんよと言うかもしれないが、縁がある方が格好がよい。額が欲しくて三角縁を付けている。中国の場合三角縁はそういう目的を持っている。中国から来た工人は当然そのノウハウを知っている。それを日本の実用に応じて工夫して三角縁神獸鏡というスタイルを考えたと。

それと先ほどの質問の中で、一番大事なことをお聞きになった。それは中国から前漢式鏡・後漢式鏡を貰った。それと同じ物を作れば良いではないか。なぜ違った物を作ったのか。先ほどの説明で機能的によいと説明しましたが、実はもう一つ有る。例が、実はこの「壹」の字である。わたしがこの紹熙本「壹」の字のように最後に跳ねている。この最後の「跳ね」が大事である。最後の「足跳ね」は、オリジナルと同じ物を作るとけしからんよと言われないように付けたものである。これと同様に前漢式鏡・後漢式鏡と同じ物を作るとけしからんと言われる。ところが三角縁のような物は中国にならぬ。そのない物にしたほうが、咎められることはない。鏡を作るということ自身は同じだが、鏡を作ること迄、駄目だと言わないだろ

う。それで三角縁を入れた特異のスタイルで鏡を作った。中国に対してだけでなく、中国とそっくりさんを作っていた、糸島・博多湾岸の本家王朝に対して、盗作ではありませんよ。そう主張している。それはわたしの想像です。もちろん機能的な話は、想像にしても誰がやってみても同じである。重ねるとき平縁より三角縁の方が都合がよい。屋外で木に吊るすとき固定するのに都合がよい。五〇センチもある平原の物は手に持って吊るせるはずありませんが、二三センチもあるもの、あれは重いですよ。わたしは大阪府柏原市国分神社から出てきた三角縁神獸鏡で一番铸上がりがよい、最も優良な海東鏡を大阪市立博物館で見せていただいたとき、抱えて持ったことがございます。まあ重いです。「・・・至海東」と書いてあり、『ここに古代王朝ありき』（朝日新聞社絶版）で表紙に使わせて頂いた鏡ですが。最近はそのつくりの鏡を作られた方もいると聞いています。ですので、博物館などで手にとつて確かめる機会があると思います。以上現在そう考えています。

質問二

先ほどの鏡の件ですが、日本の鏡はほとんど凸面鏡ですが、これを姿見と考えた場合凸面ではちよつと姿がゆがみ問題だと思えます、姿見にするのなら平面だと思えます。また西晋中国で出てきた鏡は、前漢式鏡・後漢式鏡の表の形状は凸面でしょうか、どのような形状をして、また写っているのでしょうか。

それと地名と神名が日本の古い言葉そのままだと一般的に考えられています。『魏志倭人伝』の中で有名な女王「卑弥呼」の呼び方、一般的に「ひみこ」と呼ばれています。先生は「ひみか」と発音されていますが、どのように考えられていますか。また気になるのは「難升米」という人物の呼び方をどう呼ぶか教えていただきたい。

(回答)

中国の鏡は写して見たことがあります、非常に良く写ります。姿見として非常に良く使えます。前漢式鏡・後漢式は全て表は良く写ります。それと違うのは多丑細文鏡です。吉武高木遺跡から出てきたわたしが朝鮮系と思う鏡です。これは逆で凹面です。前漢式鏡、後漢式鏡、三角縁神獸鏡は全て凸です。文字やデザインは裏です。本当の表は下になつて見えない。先ほど言いました海東鏡も表はきちんとして写ります。

つぎに卑弥呼の問題ですが、「卑(ひ)」と「弥(み)」については、従来の見解通り問題はない。問題はこの字「呼」をどう読むかです。なぜかと言いますと、別のところに「狗」という字があります。対海国・一大国の長官の名前に、私の名前の武彦の「卑狗(ひこ)」が使われています。つまり、ここに「狗(こ)」という字が使われています。

そうすると気まぐれで、「呼」と書いたり、「狗」と書いたりしていることになる。しかしわたしはピンと来ない。『倭人伝』というのは、基本的に一語一音だと思う。例外と言うか、そうでないケースもあるんですが、それには理由があるので、理由を別に考えなければならぬ。それがわたしの立場です。

それで問題は何かというと、この字「呼」には音が二つある。「呼(こ)」という音の時、意味は呼吸です。「呼(か)」は息を吸ったり吐いたりする意味です。ところがもう一つの「呼(か)」という音の意味は、どう使われるかと言いますと、「犠牲に付ける傷」を「呼(か)」と言う。そういう特殊な用法です。「犠牲」というのは生贄いけにえ、神様に牛とか豚とかを捧げますが、この場合はただ捧げるのではなく傷を付けて捧げる。そういう習慣になつている。そういう傷を「呼(か)」と言う。変な話をするのですが、わたしがおりました昭和薬科大学

のある教授が、講座の学生を集めて家の庭で野外パーティを行った。そこで子豚をまるごと買ってきて焼いて、みんなビールでも飲もうとした。しかしまんまと大失敗した。子豚を外は焼けて焼けて黒こげになるまで焼いたが、切つてみたら中は生煮えで、結局食えなかつた。この場合、傷を付けないといけないようだ。ソーセージでも傷を付けてあるのだから子豚でもかなり厚い皮膚がある。いきなり焼いても、外は焼けても中は焼けない。中を焼くためには、いっぱい傷を付けなければ火は通らないと思う。西部劇のシーンでもよく見ますが、遠くから見ているだけで良く分からないが、やはりノウハウがあるのでしようね。そういうことをお聞きしたが、神様に捧げる時、ただ捧げたら神様は困るだろう。犠牲に、傷を付けて一人勝手な理屈ですが、とにかく犠牲に、傷を付けて神様に捧げる。その事自身は想像ではなくて間違いではない。かつ文献にも出てくる。その傷のことを「呼(か)」と発音する。

この場合、この字が出てきたら、「こ」か「か」か、どちらの発音か、悩む必要がある。そうであれば「狗(こ)」は先に使つてあるから「呼(か)」の方となる。大体「こ」でも「か」でも、表す漢字はたくさんある。だからこの場合なにを使うかと問題は、音の問題ではなく、意味の問題である。ですから『倭人伝』では卑弥呼は「鬼道能惑衆」と書いて有るとおり宗教的な女王と書いてある。そうすると同じ「か」の中でも「呼(か)」の方がふさわしい。だから、わたしは、ここは卑弥呼(ひみか)と読む。従来の卑弥呼(ひみこ)という読み方は、江戸時代やその前の段階、史料批判など考えたことのない段階に、天照大神あまてるおおかみと同じ「日の巫女(ひのみこ)」であろう。誰かがそう考えて読んだ。またみんながそう読み伝えてきた。解読の論理から考えて、こういう理由で「私は卑弥呼(ひみこ)」と読む。そう

いう論文や議論したものを、わたしは見たことがない。「邪馬台国」と同じで慣例で読んでいる。わたしの解読の判断から言うと「ひみか」である。

それでは「ひみか」とは何か。「瓶(かめ)」のことを「甕(みか)」という。わたしは実体は変わらないと思う。「み」というのは尊敬の敬語です。煮炊きする物を「瓶(かめ)」と言い、神様に捧げるお酒や清らかな水、それを入れる物を「甕(みか)」という。実体は変わらないですが、神様用を「甕(みか)」という。敬語を付けている。日用品の「瓶(かめ)」の方は、「か」だけでは言いにくいので、「め」という接尾語を付けた。実体は「か」という土器を指すみたいです。「瓦」の「か」でしょう。「甕(みか)」というのは煮炊きをするわけではない。遺体を葬るのに、やはり煮炊きするのではなくて、神様に捧げる神聖な水を入れる「甕(みか)」という容器に、そこに遺体を入れる。そして亡くなった人が永遠に再び生まれ変わることを願う。そういうマジックだと思う。だから私は甕棺でなく、甕棺が良い。そう考えます。甕棺というのは、明治あたりの考古学者が今言った内容を考えずに瓶(かめ)の格好をしているから付けた名前です。それを習い覚えて、お師匠さんの言葉を使っているだけです。それでは遺体は煮炊きするのですか。そう言いますと、そんなことは誰も考えていないと言いに決まっています。だからわたしは正確には「甕棺」と呼ぶのが正しいと考えています。

そうすると、神様に捧げる神聖な土器としての「甕(みか)」、それに太陽の日(ひ)ということ、卑弥呼(ひみか)という名前だと考えています。

次の難升米(なんしやうまい なしめ)は、わたしはまだ決めていません。あの『邪馬台国』はなかった』を書いた段階では分からなかつ

た。下手な読みをしてはいけなと思うて書かなかつた。大学も退職し、毎日日曜日なので、読めるところがあれば、もう一度読んでみたい。読めなければ読めないでよいが、こういう理由で、現在の立場で、こう読めると考えてみたい。現在のわたしの宿題でございます。

(終わり)

古代史再発見『卑弥呼と黒塚 一方法』

2004年 9月 1日 第1刷発行

著者 古田武彦

編集 古田史学の会

発行人 横田幸男

東大阪市寺前町2-3-16

TEL & FAX 06-6727-0408

郵便番号 577-0845

※本書の本文書体は、ヒラギノ明朝体を使用しております。ヒラギノ明朝体で表示出来なかった文字については、文字鏡明朝体 true type を使用しております。